

史跡 斎宮跡

平成 10 年度発掘調査概報

2000

斎宮歴史博物館



第124次調査区全景（北東から）

史跡 斎宮



第1図 平成10年度発掘調査位置図（1：10,000）

はじめに

今年は、西暦二千年の年であり、世に云うミレニアムであります。前のミレニアムすなわち西暦一千年前は、我が国では平安時代の真っ直中にあたり、一条天皇の治世、長保二年であります。この年、一条天皇は、藤原定子につぎ、藤原彰子を中宮に迎えました。皇后定子には清少納言、中宮彰子には紫式部が侍して、世界の文化遺産である『枕草子』『源氏物語』が著され、不屈の名著として、今日の私どもに伝えられております。まさに平安王朝文化の精華の時代であります。

時を同じくして、この斎宮には村上天皇の為平親王を父とし、同天皇の御兄弟であり、公事典礼の典拠とされた「西宮記」の著者源高明の娘を母とする恭子皇后が斎王として在位してみえます。平安宮の華やかな王朝文化と斎宮の清浄な祭祀文化は、ともに平安時代を代表するものであり、このミレニアムの年、想いは平安文化を駆けめぐり、斎宮跡の調査研究と斎宮跡歴史ロマン再生事業を、次のミレニアムに託したいと思います。

斎宮跡の調査も、30年に及ぶ先人の業績に支えられ、斎宮跡の内院地区の解明も大きく前進しており、ここに報告いたします第124次調査でも、一千年前の建物跡などが明らかにされております。また、昨年度10月に開館いたしました「いつきのみや歴史体験館」は、その具現ともいえる施設であり、次の世代に伝えられる文化資産と申し上げることができます。

この度刊行させていただく本概報は、平成10年度に実施いたしました斎宮跡の計画調査及び史跡整備事業に伴う事前調査の成果の概要をまとめたものであり、これまでの膨大な調査成果の蓄積と相まって斎宮跡の実態解明にとって貴重な資料となるものと信じております。

斎宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、文化庁をはじめ斎宮跡調査研究指導委員会の先生方の御指導や、地元明和町をはじめとする関係機関・各位の御協力の賜物と感謝申し上げます。

平成12年3月

斎宮歴史博物館

館長 大井與生

例　　言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成10年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査の概要をまとめたものである。
- 2 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け事業主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、国土調査法による第VI座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。
- 4 遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。
S B；建物 S A；柵列 S E；井戸 S K；土坑 S D；溝 S F；道路 S X；その他
- 6 方格地割における各区画の名称は第23図に示した。
- 7 特に表示が無い限り遺物実測図は実物の4分の1、遺物写真は約3分の1である。
- 8 用語は、「墓に関わる穴」には廣、「他の穴」には坑を用いた。また、遺物については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「杯」「椀」等を用いた。
- 9 斎宮跡の調査全般については、斎宮跡調査研究指導委員会の委員の指導を得た。（敬称略）

京都橘女子大学学長	門脇禎二
千葉大学教授	北原理雄
聖心女子大学助教授	佐々木恵介
元奈良国立文化財研究所所長	鈴木嘉吉
（財）大阪文化財調査研究センター理事長	坪井清足
岐阜聖徳学園大学教授	所 京子
愛知県陶磁資料館総長	横崎彰一
三重大学名誉教授	八賀 晋
皇學館大學教授	渡辺 寛

- 10 現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究担当の駒田利治、上村安生、大川勝宏、角正芳浩があたり、松月浩子、八木光代がこれを補助した。また、遺物整理には島村紀久子、西村秋子、杉原泰子の協力を得たほか、池野香代（皇學館大學大学院生）、中島沙恵（佛教大学々生）、大西瞳（花園大学々生）の参加を得た。

目 次

I 調査の経過と概要	1
II 第 124次調査	3
III 第 126次調査	38
発掘調査報告抄録	64

表・挿図目次

〔表〕 1 平成10年度発掘調査一覧	2
2 第124次調査時期別遺構一覧表	7
3 第124次調査掘立柱建物・檣列一覧表	40
4 第124次調査遺物観察表	41
5 竜宮跡発掘調査次数一覧表	58
〔図〕 1 平成10年度発掘調査場所位置図（1：10,000）	
2 第124次調査 調査区位置図（1：2,000）	3
3 ノ 遺構実測図（1：200）	6
4 ノ S E 8085土層断面図（1：40）	8
5 ノ 遺物実測図（SK8057・SK8088）	13
6 ノ 遺物実測図（SK8088）	14
7 ノ 遺物実測図（SK8088）	15
8 ノ 遺物実測図（SK8088・SK8084）	16
9 ノ 遺物実測図（SK6792・SK6794）	18
10 ノ 遺物実測図（SK8063・SK8065・SK7930・SK8071・SK8089）	20
11 ノ 遺物実測図（SK8093・SE8058・SK8059・SK8094）	22
12 ノ 遺物実測図（SK8069・SK8072・SK6750）	24
13 ノ 遺物実測図（SK6750）	25
14 ノ 遺物実測図（SD1460）	26
15 ノ 遺物実測図（SD1460・SK8073）	28
16 ノ 遺物実測図（SK8066）	30
17 ノ 遺物実測図（その他の遺物）	31
18 ノ 鍛冶山西区画遺構変遷図（1）	35
19 ノ 鍛冶山西区画遺構変遷図（2）	36
20 第126次調査 調査区位置図（1：2,000）	38
21 ノ 遺構実測図（1：200）	39
22 竜宮跡地区表示	62
23 竜宮跡方格地割区画名称	63

写 真 図 版

巻首図版 第 124 次調査 航空写真

P L 1	上：調査区全景（上から）	下：調査区全景（北から）
P L 2	上：SA2705（西から）	下：SB7385・8050（北から）
P L 3	上：SB8050（東から）	下：SA6790・SD6803（北から）
P L 4	上：SB8060・8061・8062（北から）	下：SB8091（南から）
P L 5	上：SB7915・7916・7917（北東から）	下：SB8090（東から）
P L 6	上：SB6740（東から）	下：SE8085（東から）
P L 7	上：SK6792 遺物検出状況（北から）	下：SK6794 南焼土面立ち割状況（西から）
P L 8	上：SK8088 遺物出土状況（東から）	下：SK8088 埋土断面（南から）
P L 9	上：SD1460 遺物出土状況（南から）	下：SD8066 遺物出土状況（北から）
P L 10	上：SD8063・8064（東から）	下：SD8069・SK8071（東から）
P L 11	第 126 次調査上：調査区全景（西から）	下：SD8098・8099（南から）
P L 12	第 124 次調査遺物写真（SK8057 SK8088）	
P L 13	遺物写真（SK8088 SK8084 SK6792）	
P L 14	遺物写真（SK6794 SK8071 SE8058 SK8059）	
P L 15	遺物写真（SK8069 SK8072 SK6750 SD1460）	
P L 16	遺物写真（SD1460）	
P L 17	遺物写真（SK8073 SK8066）	
P L 18	遺物写真（SK8066 墨書き器、石帶）	

I 調査の経過と概要

経過

古里地区での宅地開発計画に伴い、昭和45年に始まる斎宮跡の発掘調査は、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定され、それ以降史跡解明の計画調査を継続して実施している。

これまでの発掘調査成果の蓄積から平安時代初期を中心とした想定を想定している方格地割において、方形区画内を巡る柵列や、大型掘立柱建物の規則的な配置、祭祀を想起させる土坑の存在等から、当該期における斎宮寮の中枢部の可能性が強い牛葉・鍛冶山地区における構造解明に重点をおいて調査を進めている。

また、史跡指定以降、管理団体である明和町が文化庁及び県の補助を得て実施している史跡の買い上げの進捗と相まって、公有地の管理と史跡の活用が課題となり、平成5年度に『史跡斎宮跡整備基本構想検討調査報告書』刊行、平成8年3月に『史跡斎宮跡整備基本構想』の策定を行なうとともに、平成7年度には文化庁の指導を得ながら『史跡斎宮跡「遺構の活用・演出的整備ゾーン」整備基本計画』を確定した。

整備計画地は斎宮駅北側の方格地割北西隅部に想定される地区であり、公有化が最も進捗した地区であるとともに、斎宮跡及び斎宮歴史博物館への窓口の一つであり、また、近代の瓦粘土探査によって遺構の保存状況が必ずしも良くない地区であることにより、『史跡斎宮跡 整備基本構想』の「遺構の活用・演出的整備ゾーン」として、137.1haの広大な広がりをもつ斎宮跡の理解を体験的に深めるため、1/10史跡全体模型を核とした体験学習を実施できる整備ゾーンとして位置づけた。平成10年度は、体験学習施設の建築工事を実施している。

第124次調査

第119次調査に引き続き、内院地区と想定される鍛冶山西地区の中枢部において、周辺の既調査である第92次・第98次・第109次・第119次調査での成果と当該地区的遺構変遷を解明するため、第124次調査を実施した。

調査の結果、内郭柵列の北東隅を確定し、内郭北辺の総長が200尺で造営され、外郭と中心軸を違えるが東西とも南に折れ内郭を形成する事が明瞭になった。また、内郭存続時には、内郭内の北部分には、5間×2間の大型掘立柱建物が2棟、第119次調査のSB7950と内郭柵列を介して、東西に棟方向を合わせて配置されていること、倉庫と判断される大型総柱建物や、後続する平安時代前期の大型掘立柱建物群、方形井戸並びに平安時代中期を中心とする土器溜まりも數基検出しており、奈良時代後期から平安時代中期までの斎宮の中枢部が置かれたことが明確となった。

第1回調査研究 指導委員会

第124次調査が終了した10月9日(金)に今年度第1回目の斎宮跡調査研究指導委員会を開催し、現地指導も含め、内院地区的遺構についても指導・助言を得た。

また、整備事業についても、体験学習施設の建築指導及び1/10史跡全体模型の整備計画についても指導を受けた。さらに、体験学習施設で実施する体験学習の内容についても助言を得た。

第126次調査

平安時代の斎宮が置かれた方格地割は東西7列、南北4列の規模を持つことが確認されているが、その四至は必ずしも明確ではなく、平成4年度の第96-5次調査で発見された八脚門以外、宮門の検出もみられず方格地割の外郭線は今後の課題となってい

る。こうした状況のもとで、方格地割南辺の東西道路・側溝等の区画施設の検出を目的として中西東区画の南辺中央で第126次調査を実施した。

調査の結果、南北方向の溝2条のほか、溝・土坑等を検出したが、ともに室町時代以降のものであり、平安時代の東西道路の側溝等の外郭施設の確認は、課題を残すままとなつた。

第2回調査研究
指導委員会

体験学習施設の建築工事が本格的な時期を迎えた3月2日(火)に、施設の建築指導、1/10建物模型の材質について審議いただいた。1/10建物模型の材質については、木製・FRP製・アルミ合金製の3素材を用いた1/10模型の暴露試験を、今年度4月から実施しており、その状況の観察を得ながら審議・指導をいただき、最終決定を次回の委員会で行なうことで了解を得た。

現状変更調査

その他、史跡現状変更に伴い管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当している事前の緊急発掘調査は、本年度は4件を第125次調査として実施し、工事立ち会いを25件実施した。

第125-1次調査は、平成9年度に歴史の道北側で実施した第123-6次調査に引き続き、昨年度調査区の南部分を調査し、奈良時代の竪穴住居2棟のほか、鎌倉時代の井戸等を検出した。竪穴住居から出土した遺物は、奈良時代の後期の土器構成を知る上で貴重な資料となつた。

第125-2次調査は、旧参宮街道で行なわれた水道管の敷設変え工事に伴うものであり、調査区の幅が0.7mと狭く、遺構の検出には至らなかつたが、史跡内における遺構面の東西方向の状況について、大凡の知見を得ることができた。

第125-3次調査では奈良時代の溝の存在を確認し、第125-4次調査では、内山西区画において掘立柱建物等を確認し、それぞれの調査区は、制約も大きく小規模な調査であるが着実に成果を積み上げている。

(駒田利治)

調査次数	地区名	面積 (m ²)	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
124	6AFM-BEG	978	H10.7.6~H10.11.12	斎宮字鍛冶山2740-3	個人	計画調査	2
126	6AGU	200	H10.10.19~H10.11.24	斎宮字中西	個人	計画調査	3
合計		1,178					

調査次数	地区名	面積 (m ²)	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
125-1	6ACC-I	336	H10.4.3~H10.5.14	斎宮字塚山3337-1他	個人	個人盛土	3
125-2	6AES	412	H10.9.29~H11.1.26	斎宮竹川地内	明和町	水道改修	3
125-3	6ADD-R	60	H10.12.4~H10.12.28	斎宮字篠林	個人	倉庫新築	3
125-4	6ACN	39	H11.1.7~H11.2.5	斎宮字広頭	明和町	水路改修	3
合計		847					

第1表 平成10年度発掘調査一覧

II 第 124 次 調査

(6 A FM-B・E・G)

1 はじめに

方格地割と 内院の解明

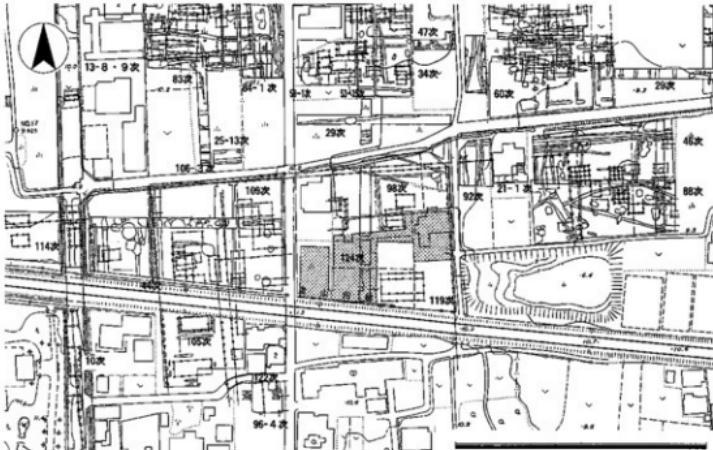
これまでの史跡斎宮跡の約30年に及ぶ発掘調査により、奈良時代後期から平安時代前期にかけて整備されたと考えられる一辺約120mの方形区画を基本とする方格地割と、その中心部である内院と推定される地区的解明は飛躍的に進展してきた。

特に鍛冶山西区画と呼ばれる方格地割中央部の区画は、第44次調査（昭和57年度）で区画内を囲繞する柵列が発見されたのを皮切りに、第92次調査（平成3年度）、第98次調査（平成4年度）でその柵列の東西方向の全長が、従来考えられてきた方形区画の規模を大きく越えて東に延長しており、第105次調査（平成6年度）、第109次調査（平成7年度）では、既知の柵列の内側で新たに柵列の囲みを発見し、この区画のみが少なくとも東西方向に、従来考えられてきた方形区画を大きく越えて東に広がっていた段階がある事、また区画内の柵列の囲みが二重になっていた事など、この区画が他の区画より大規模で、より莊重な構成となっている事が明らかになった。

さらに昨年度実施した第119次調査では南北両面に庇をもつ6間×4間の規模の斎宮跡最大級の掘立柱建物を発見し、多数の土器溜まり遺構や大量の綠釉陶器などの出土とともにあわせ、この区画の内院推定地としての優越性は揺るぎないものとなっている。

しかし、依然としてその中心的性格の建物は発見されておらず、また、区画の内郭を構成する内側の柵列の東辺を第119次調査において発見する事ができず、区画のシンメトリカリィの上で課題も生じている。

今回の第124次調査は、この鍛冶山西区画のうち、近鉄線より北側の範囲で、これまでの調査地に挟まれた約 978m²を対象とし、この区画の構造と変遷を明らかにするために平成10年7月1日から11月12日にかけて実施した。



第2回 第124次調査 調査区位図 (1:2,000)

2 遺構

調査区の概況

調査区の現況は畑地及び荒蕪地で、南は近鉄山田線に接し、南から北に向かって緩やかに傾斜する。調査区はこれまでの周辺調査地や立ち木等を避けるため、西部・中央部・東部の3カ所をトレントで連結した複雑な鍵状の形状となっている。

調査区の基本的な層序は表土（耕作土）、にぶい暗褐色土（包含層）、黄橙色～赤橙色で部分的に円礫群が露頭している粘質土（地山：遺構検出面）で、調査区西部では地山上面が深く削平されており、中央部東南端では近世以降の寺院が立地していたため斎宮期の遺構は擾乱されていた。また東部では近年まで民家が建っていたため、現在も井戸が残存しており、包含層は擾乱されて大量の瓦や陶磁器が棄てられていた。

(1) 奈良時代後期の遺構

掘立柱建物4棟と鍛冶山西区画の内郭を構成する柵列の北辺と東辺がある。

SA2705・8080

まず内郭柵列は、第109次調査区から延びてくるSA2705の延長を調査区内で8間分確認した。柱間寸法約3.0m（10尺）、柱掘形の平面は一辺0.9mの方形である。

また、今回の調査で、第29次調査のトレントで確認していた柱穴列が、この内郭柵列の東辺となる事が改めて確認されたため、これをSA8080とした。近世の溝が重複する事もあって、既に柱掘形の形状が失われているが、第29次調査のトレント間の畦畔部に残存していた北東角から3間南に位置する柱穴を精査した結果、一辺約1.0mの方形でSA2705とほぼ同規模のものと推定される。柱痕跡は、いずれも直径約30cmである。

この結果、内郭の東西柵列SA2705は20間である事が確定した。なお、SA8080は調査区内の擾乱のため、南への延長は不明である。

SB7385・8050

掘立柱建物では、第109次調査で確認されたSB7385の東梁行を確認し、柱間寸法が約3.0m（10尺）で5間×2間の東西棟である事が判明した。柱掘形は一辺約1.0mで、柱痕跡は直径約40cmである。また、その2間分東に桁行の柱筋をあわせて同一規模のSB8050を検出した。SB8050には柱抜取り痕が認められる。2棟は第119次調査のSB7950の身舎とも柱筋をあわせている。また2棟はいずれも内郭柵列とも柱筋を合わせているが、内郭の東西中心軸とは配置が整合しない。

SB6740・8090

調査区東部では2棟の総柱建物を見つかった。第98次調査で一部が確認されていたSB6740は、3間×3間の規模となる事が確定した。東西の柱間寸法は約1.8m、南北は約2.1mで、柱掘形は一辺約1.0～1.2m、柱痕跡は直径約40cmの大型建物である。新たに発見したSB8090は、SB6740と全く同規模のもので、2棟間の間隔は約8.9m（30間）で計画性が窺われる、併存していた可能性が高い。SB6740には柱抜取り痕が認められる。

SA6770

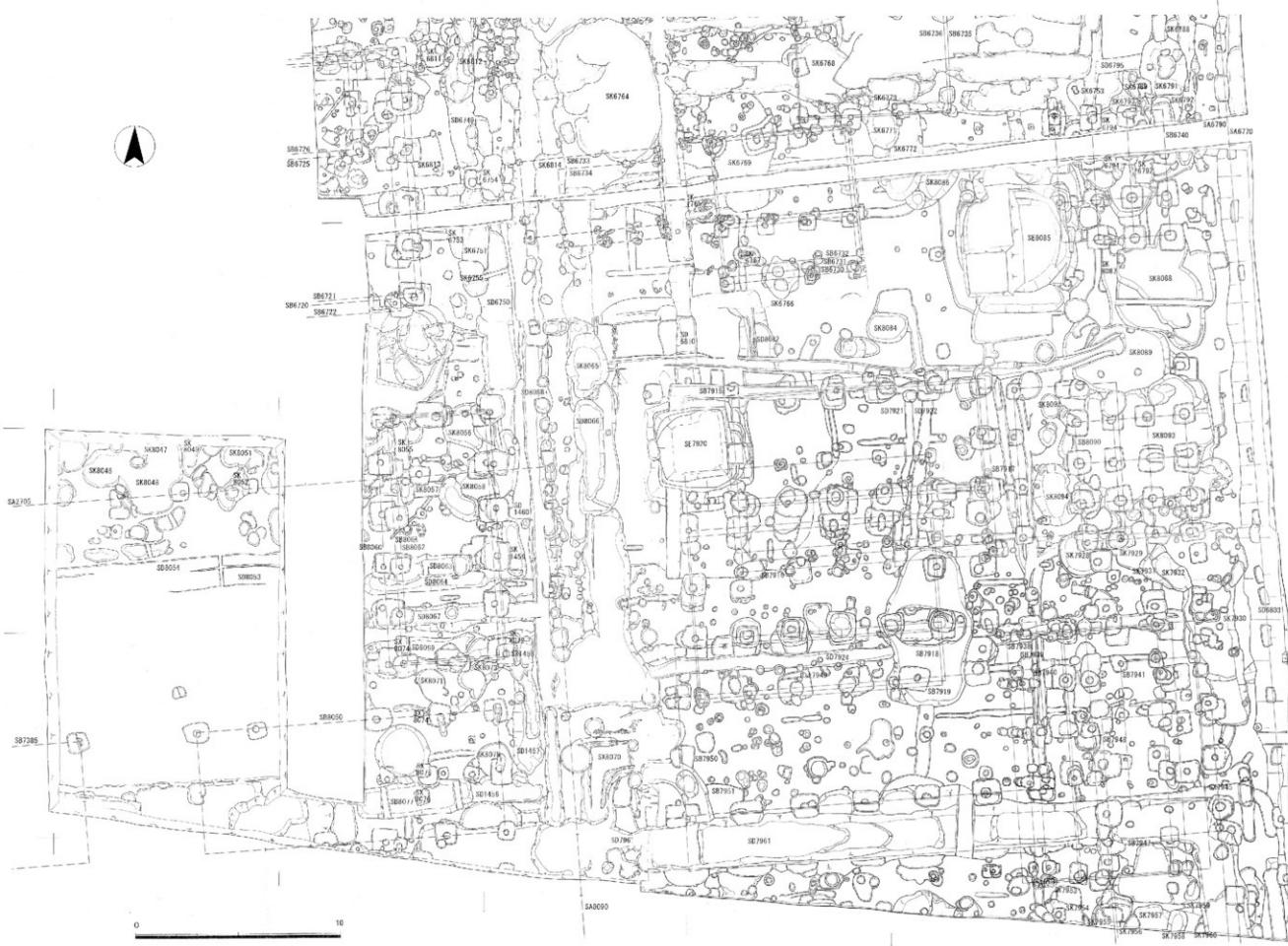
なお、第98次・119次調査で確認されているSA6770は、今回の調査区内では確認する事ができなかった。

(2) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物3棟、柵列1条、井戸1基、土坑1基、溝1条がある。前段階の建物・内郭柵列は全て廃絶し、区画の構造が大きく変化した事が窺われる。また外郭柵列も全体に南へ約2.4m移動して、北辺柵列SA6780、東辺柵列SA6790、西辺柵列SA2675に建て替られるのもこの段階と考えられている。

SB8060・8061

調査区中央部で新たに南北棟が2棟建てられる。SB8060は、5間×2間の規模で、柱間寸法は約2.4m（8尺）である。SB8060は、同じ位置で同規模のSB8061に建て替



第3図 第124次調査 遷構実測図(1:200)

えられる。いずれも柱掘形は、一辺約1.2mの方形の大型で、SB8061の柱痕跡は直径約40cmである。南側梁行柱筋を第119次調査検出のSB7918・1919の身舎に揃える。

SB8091 調査区東部で確認された3間×2間の南北棟となるとみられるものである。平安時代前Ⅱ期のSK8093が重複するため、東側の桁行柱筋が欠失している。柱穴は、一辺約0.8m、柱痕跡は直径約30cmである。

SA6790 檻列では、SA6770に後続するSA6790を確認する事ができた。柱痕跡は残らないものの柱間寸法は約3.0mとみられる。なお、檻列の北東角から22間目にあたる柱穴は精査したにも関わらず見つける事ができなかった。

SE8085 調査区東部で発見された大型の井戸である。井戸掘形は一辺約6mの略方形で、この周辺には深さ約0.3~0.7mの方形の土坑状の掘り込みが少なくとも北・西・南側には掘削されている。この部分は砂礫の混ざった粘質土で充填され固く締まっていた。

遺構検出時には、井戸掘形の埋土と明確に区別できず、第119次調査で確認されたSE7920と同様の地業をもつ井戸と考えられる。ただしSE8085の場合、SE7290のように版築構造は明確なものではなく、規模も小さい。また、井戸掘形に重複して現代の井戸が残っているため、東半分のみで遺構面から2.3mの深さまで調査した。出土遺物は遺構の規模に比して整理箱で1箱程度と少ない。土師器杯・台付杯・高杯・甕・瓶・壺、須恵器杯・甕、灰釉陶器碗の破片が出土している。

SK8078 調査区中央部南の直径1.6m、深さ0.3mの円形の土坑である。埋土は地山粒混じりの黒色土で、遺物は土師器の小片が出土したのみである。

SD8077 調査区中央部南の東西方向の長さ5.7m、幅1.6m、深さ0.4mの溝で、断面形が浅い「U」字状になる。黒色の埋土で、SK8078と酷似する。遺物は土師器の小片が僅かに出土したのみである。なお、この東側に延長するSD1456は、ほとんど出土遺物がなく、第29次調査の出土遺物の中に平安前期に入る可能性のあるものが含まれているため、あるいはSD8077を再掘削したものかもしれない。

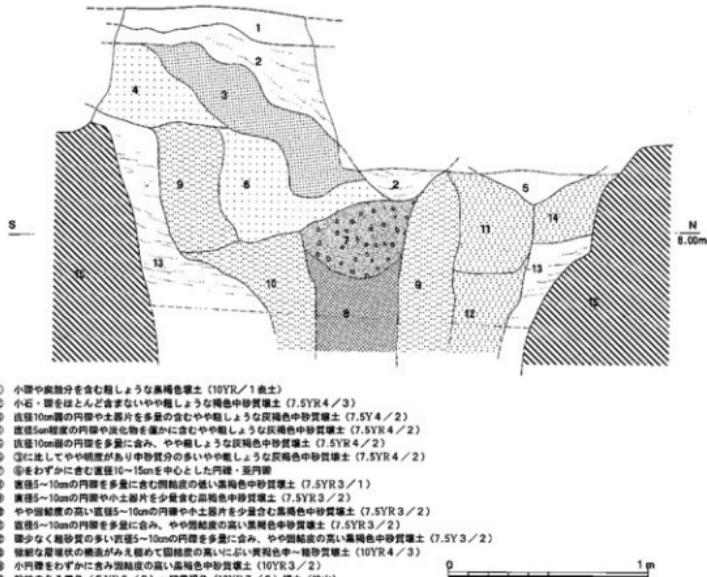
(3) 平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物4棟、土坑4基がある。

		遺構の種別												
		S	B	S	A	S	K	S	D	S	E	S	X	
奈良	後期	6740	7385	8050	8090	2705	8080							
	初期	8060	8061	8091		6790		8078		8077		8085		
	前Ⅰ期	7915	7916	7917	8062			8081	8084	8087	8088			
平安	前Ⅱ期							6772	6792	6794	7929	1456	6810	8053
								7930	8046	8047	8055	8054	8063	8064
								8065	8071(下層)	8086				
	中期							8049	8056	8057	8058	1459	1460	6750
								8059	8071(上層)	8072		8066	8069	
								8073	8083	8094				
近世								7961	8067	8068		7961	8067	8068
								8082				1458	8070	
不明								8048	8051	8052		6803	7922	

第2表 第124次調査 時期別遺構一覧

- SB8062 平安時代初期のSB8060—8061から引き続き建て替えられた5間×2間の南北棟である。柱間寸法は2.4m(8尺)柱掘形は一辺0.9~0.6mの方形で、柱痕跡は直径約30cmの大型建物である。
- SB7915~7917 昨年度の第119次調査の際に大部分が確認されており、今回それぞれ新たに身舎の東梁行の柱穴を確認した。結果、いずれもが4間×3間の南面庇付きの建物で、柱間が桁行2.4m(8尺)、梁行2.7m(9尺)である事が確定した。それらの建物も棟方向を外郭柵列と揃えている。
- 土 坑 この時期の土坑は全て調査区の東半分に集まっている。特にSK8081以外はいずれも大量の土器類が出土した所謂「土器溜まり」である。
- SK8084 1.1×0.9m、深さ0.5mの楕円形で、整理箱7箱分の土師器杯・皿・蓋・高杯・甕・甌・壺片・ミニチュア土器、須恵器台付杯・蓋・壺、炭化材などが出土している。
- SK8087 SB6740に重複する直径約0.8m、深さ約0.6mの小規模な土坑だが、土師器杯・皿・甕・須恵器杯・盤・壺が炭化材を伴って整理箱で4箱分出土している。
- SK8088 東西3.2m、南北2.9m、深さ0.5mの不整楕円形の土坑である。大量の土器類が埋没しており、検出段階では複数の土坑の重複を想定したが、トレンチによる断面観察でも埋土の重複関係や遺物の明確な時期差は判断できなかったため、一括して扱っている。炭化材や焼土塊も多量に含んでおり、炭化材は微細なものばかりではなく、直径5~6cm、長さ約10cmのものもある。土師器は杯・皿・台付杯・蓋・平底鉢・壺・甕と都城の形式分類で壺Eとよばれる小型の無頸壺が、須恵器では台付杯・盤・蓋・甕(あるいは短頸壺)やスサ入りの粘土塊などが整理箱で33箱分出土している。



第4図 S E8085土壌断面図 (1 : 40)

SK8081	調査区中央部北辺で検出された土坑で東西1.7m、南北約2.0m、深さ約0.2mの浅い土坑で、遺物は土師器杯・甕の小片が少量出土したのみである。
(4) 平安時代前II期の遺構	土坑13基、溝6条があるが、この時期から今回の調査区内では掘立柱建物はみられなくなる。
SK8046・8047	調査区西部で検出された土坑で、遺構の上部はほとんど削平され、近世以降の擾乱もうけているため詳細は分からないが、微細な土師器杯片などが出土地しており、この段階のものと想定した。
SK8055	調査区中央部SB8062が廃絶した後に掘削された南北2.2m、幅0.7m、深さ約0.15mの細長い土坑である。土師器杯・皿・壺、須恵器蓋が少量出土している。
SK8065	調査区中央部にある。上面を一部SD8066に重複されているが、南北2.9m、東西2.1m、深さ0.7mとやや深い。遺物は少なく、土師器杯の小片が僅かに出土した。
SK8071下層	SB8062の南側に位置し、上層に平安時代中期の土器溜まりがあり、これをSK8071上層として区別した。底部の落ち込み状になったところから土師器杯・皿・台付皿・甕などが出土している。
SK6772・8086	調査区東部に第98次調査区に接して一部が検出されている。SK6772は、南北4.6mの長楕円形になる事が判明した。土師器、須恵器、灰釉陶器の小片が出土している。
SK6792・6794	調査区東部のSK6792・6794は、第98次調査で北端を確認している。重複関係ではSK6794の方が新しいと判断される。SK6792は、南北約5.0m、東西約4.0m以上、深さ約0.4mで、土師器杯・皿を中心に、土師器甕・長胴甕・壺片、須恵器台付杯（転用硯含む）・蓋・壺・壺、土錐・製塙土器などの遺物が整理箱で12箱分出土しており、多量の炭化材も含まれている。遺物は上下2層に分離して取り上げたが、遺物に形式差は認められなかった。SK6794は東西約2.0mで、土師器杯・皿、須恵器杯・台付杯・甕などが整理箱で9箱出土している。
SK8092	長径1.2m、深さ0.2mの小規模な土坑で土師器杯・甕片が出土している。
SK7929・7930 ・8093	調査区東部の南に位置する土坑である。SK7929・7930は第119次調査で大部分検出されている。SK8093は直径約5.5m、深さ0.5mの大型土坑で、土師器杯・皿・蓋・台付杯・高杯・台付鉢・甕・長胴甕・壺・壺片、黒色土器片、須恵器杯・台付杯・蓋・壺・甕、灰釉陶器碗・壺・皿、土錐などが出土しており、整理箱で8箱分になる。ただし、いずれも磨耗した破片が大半であり、他の土器溜まりの土坑とは様相が異なり、第119次調査で大半を検出しているSK7929・7930と同様の状況といえる。
SD6810	第98次調査でその北側の延長が確認されており、第119次調査ではSE7920以南で途絶している事が確認されている。第98次調査区では断面逆台形の区画溝的な性格が想定され、第119次調査の報文ではSE7920の排水溝的な性格も想定し得るとされている。今次調査では中央部で幅0.8m、断面が「U」字状の部分を延長2.3m分検出している。出土遺物は平安時代前II期に相当すると考えられる土師器杯、須恵器台付杯・蓋・甕などの小片が少量出土しており、掘削時期がどこまで遡及できるかは明確ではないが、最終埋没はこの前II期まで下るものと考えられる。
SD8053・8054	調査区西部で深さ5cm程度が痕跡的に確認された溝である。遺物は土師器杯片などが極少量出土したのみだが、後述するSD8064などの延長の位置にある事から、本来区

画溝的な性格をもっていた事が窺われるものである。

- SD8063・8064 SD8053・8054を東に延長した位置にある同規模の溝である。ただしいずれも西端は調査区中央部南端でいったん途絶するようである。遺構の重複関係ではSD8064の方が古い。SD8063は延長約4.0m、幅1.2m、深さ0.5mで断面逆台形状になる。底部は土坑状の落ち込みがみられる。比較的多量の遺物が出土しており、土師器杯・皿・台付杯・台付皿や炭化材を中心に、他の土器溜まり土坑と同様の内容で整理箱8箱分が出土した。なお、この中には平安時代中期のものも多いが、遺構の掘削時期は前Ⅱ期まで遡るものと考えられる。SD8064はほぼ同規模で、深さ0.3mになる。やはり土師器供膳具を中心とした8箱の遺物が出土した。なお、これらの溝は東端で平安時代中期に埋没するSD1460やSK1459に接続し、鍛冶山西区画内を細分する区画施設をなしていたものと考えられる。
- SD1456 平安時代初期のSD8077の東に延びる東西溝である。幅約1.0m、深さ0.25mで検出延長は3.5mである。遺物は先述の通り微細な土師器片等があるにすぎない。
- (5) 平安時代中期の遺構
土坑10基、溝5条がある。
- SK8049 調査区西部北端で検出された土坑で、深さ5cm程度の痕跡のみの検出である。土師器杯小片が出土している。
- SK8056～8059 調査区中央部の逆「L」字状になる区画溝の内側で集中して検出された土坑群で、いずれも深さ約0.2mの小規模なものだが、SK8058で4箱、SK8059で6箱の遺物が出土している。土師器杯・皿類の供膳具が中心で、炭化材が混入する。
- SK8071上層～8073 当該期の区画溝からみて上記の土坑群の対照的な位置にあり、規模・時期的に近似する。SK8071上層は平安時代前Ⅱ期の遺物が廃棄された上面に、あるいは再掘削されてできた廃棄土坑とみられる。SK8071上層で5箱、SK8072で2箱、SK8073で10箱の遺物が出土しており、土師器供膳具がその大半を占めている。
- SK8083 調査区東部の小土坑で、長さ2.0m、幅1.0m、深さ0.2mで、土師器杯・台付鉢・甕・甕片・製塙土器・須恵器蓋・甕と炭化材、また底部で焼土塊を確認している。
- SK8094 調査区東部のSK8093に接する土坑で、長さ3.0m、幅1.8m、深さ0.3mの梢円形のもので、土師器杯・皿・台付杯・把手付甕・甕片・須恵器杯・甕・灰釉陶器椀・壺・綠釉陶器・炭化材などや、土器類に鏡着して角釘も少量出土している。
- SD1459・1460・6750 この段階の溝は前段階のSD8053・8054・8063・8064とともに、鍛冶山西区画を細分する区画施設をなしたものと考えられる。標記3条の溝は連続する南北方向の溝で、幅は1.1m前後だが、深さはSD1459が0.5m、SD1460が0.3m、SD6750が0.4mと一定しない。なお、SD6750は第98次調査区内まで延長し、この南北溝の連続は総延長約27mまで確認できる。遺物は極めて多く、平安時代中期の土師器杯・皿・台付杯・台付皿などの供膳具を中心に、黒色土器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器と炭化材が整理箱に40箱以上出土した。遺構の重複関係では、SD1460が新しい。SD8063・8064とは直角に交わり、掘削時期は平安時代前Ⅱ期まで遡りして考え得る。
- SD8066 SD1460などの東側に約2.5mの間隔をあけて並走する溝で、北端と南端は攪乱土坑などのために明瞭ではないが、検出長4.9m、幅1.5m、深さ0.7mで、土師器杯・皿・台付杯・台付皿などの供膳具と須恵器、灰釉陶器・綠釉陶器や炭化材が13箱程出土し

	ている。
SD8069	SD8063・8064の南側に約2.4mの間隔を開けて並走する溝で、同様に西端は未調査区の手前で途絶する。延長6.2m、幅1.6m、深さ0.5mで規模も近似する。土師器杯・皿類と須恵器、炭化材が整理箱で3箱出土している。
牛葉東区画の区画溝	以上のような平安時代前Ⅱ期から中期にかけて掘られたとみられる平行する溝は、時期が平安時代後Ⅰ期と若干下るもの、西接する牛葉東区画でもほぼ同様のものがみられる。版築等の痕跡を溝間の空閑地や構埋土内に見いだせないものの、土壘状のものなど区画内を細分していた可能性が考えられ、牛葉東区画に先行して鐵治山西区画にこうした区画構造があり、平安時代中期～後Ⅰ期に区画溝が廃絶、埋没とともに、牛葉東区画で同様の構造が成立する事は注目すべき事象といえよう。
(6) 近世の遺構	明治2年に焼失したという蓮光寺の関係とみられる遺構があり、墓壙5基、溝3条や階段状遺構などがある。
SX8079	調査区中央部南の大きく落ち込んだ中で、逆「L」字状の両側に側溝とみられる細い溝を伴った通路状の部分があり、その東端に人頭大程度の円礫を使って階段状に作られた部分がある。その北側の約0.6m程高くなった所には、直径15cm程度の小礫が並べられており、寺院への通路遺構であった可能性が考えられる。
SD8067・8068	通路状になるSX8079の前を横切り南北に延びる幅約1.0m、深さ約0.6mの断面逆台形のSD8068と、それに直交して西へ延びる同様の規模のSD8067がある。SD8068は第29次調査の際に周辺の搅乱土坑と一括で調査されているため出土遺物の様相は判別しにくいが、SD8067からは多量の一石五輪塔や石臼、石造地蔵尊の残欠が陶磁器類や瓦とともに出土している。
SD7961	第119次調査で検出された大規模な区画溝の西端の部分が確認されている。調査区南壁の観察ではこの部分で南側へ折れるようで、推定される区画の東西長は溝の内側で約14mになる。SD8067・8068共々近世寺院の施設を区画するものとみられる。
近世墓群	SD8067と8068の交点の南西側に集中する近世墓群である。1.0m×0.7mの長方形のプランをとるもの(SX1458・8070)、小さなピットに藏骨器を伴って埋葬されるもの(SX8074)、一边0.7mの略方形のプランのもの(SX8075・8076)の3形式に大きく分けられるようである。
	SX1458・8070ではわずかに痕跡的に残った人骨がみられ、SX8070では埋土から長さ1寸ほどの多数の釘が出土している。SX8074は直径0.6mのピットに陶器無頸壺を藏骨器として納め、その上に15×9cmの平瓦を蓋として載せている。内部にはほとんど風化した人骨と釘類がみられた。SX8075では残存状況が比較的良好な座屈した状態の人骨が出土し、左手首付近に念珠とみられる直径約3cmの穿孔された白玉が多数出土している。
	これらの実年代観については、SX8074の藏骨器が生産地とみられる瀬戸窯の編年観から19世紀中頃のものとみられ、他の近世墓も重複が全く無く、出土する釘もほぼ同一の物である事からいずれもおおむね同時期のものと推定される。
	蓮光寺の寺域の区画に関連するとみられるSD7961の西側にこれらの墓壙群は位置することになり、寺院と墓地の位置関係を考える上で好資料となろう。

3 遺 物

今回の調査では数多くの土器溜まり遺構が発見され、昨年度の第119次調査とは対照的に土師器類を中心として極めて大量の遺物が出土しており、また近世以降の瓦類や五輪塔などの石造物も大量に出土した。出土量は整理箱で総計約340箱に及ぶ。

土器溜まりの遺物は、斎宮跡の土師器編年で平安時代前Ⅰ期から中期頃のもので、大半は土師器供膳具である。以下時期を追って主要な一括資料について概述する。

(1) 平安時代前Ⅰ期の遺物

奈良時代後期から平安時代初期にかけては良好な資料がなく、一括性の高いものは平安時代前Ⅰ期の土器溜まりの資料から現れる。この時期の土器溜まりは調査区東半に集中する。

SK8057

小規模な土坑だが整理箱で4箱の遺物が出土している。土師器杯類は体部から口縁部がやや内湾するもの（杯B）が主体で、底部と体部の屈曲点から口縁部にかけてヨコナデして外反するもの（杯A）は少量みられるのみである。土師器杯B（1～5）は口径12.5～13.5cmである。（5）は底部に直径約7mmの焼成後の穿孔が施されている。

土師器皿は口縁部が外反する皿A（6・7）と、底部から口縁部にかけて緩やかに内湾する皿B（8・9）がある。皿Aは口径およそ16.5～18.0cm、皿Bは15.5～16.5cm程度で、皿Aに対しやや厚手となる。

須恵器では台付杯や壺の小片等があるが、台付杯には外側に向かって口縁部が開く（10）と、底部と体部が強い稜をもって上方に立ち上がる（11）がある。

SK8088

SK8087に重複する直径3m程度の不整円形の土坑で、複数の土坑が重複する可能性もあるが、埋土断面観察等では明確な時期差は判別できていない。整理箱で33箱と大量の土器が出土している。

土師器

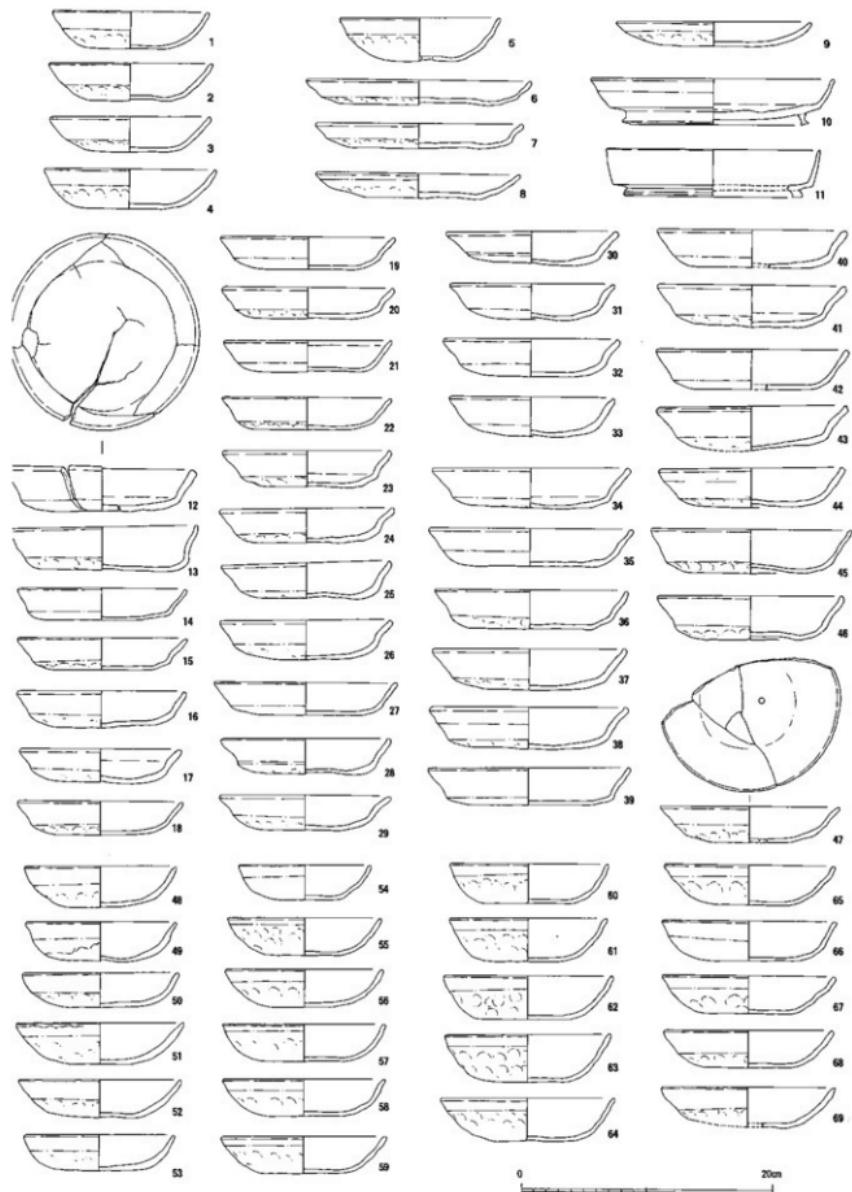
土師器供膳具では杯A（12～47）・杯B（54～94）と「いなか風椀」と呼称される粗製の椀（48～53）、皿A（96～118）・皿B（119～166）、口縁部は内湾する形態ながら底部が丸みを持ち、深めで杯Bと皿Bの中間的な要素を持つ皿Cとでもいうべき形態のもの（167～171）がある。また、杯Bも底部が比較的平らに作られる傾向のもの（54～80）と、やや丸みを持つ傾向もの（81～94）がある。

杯A

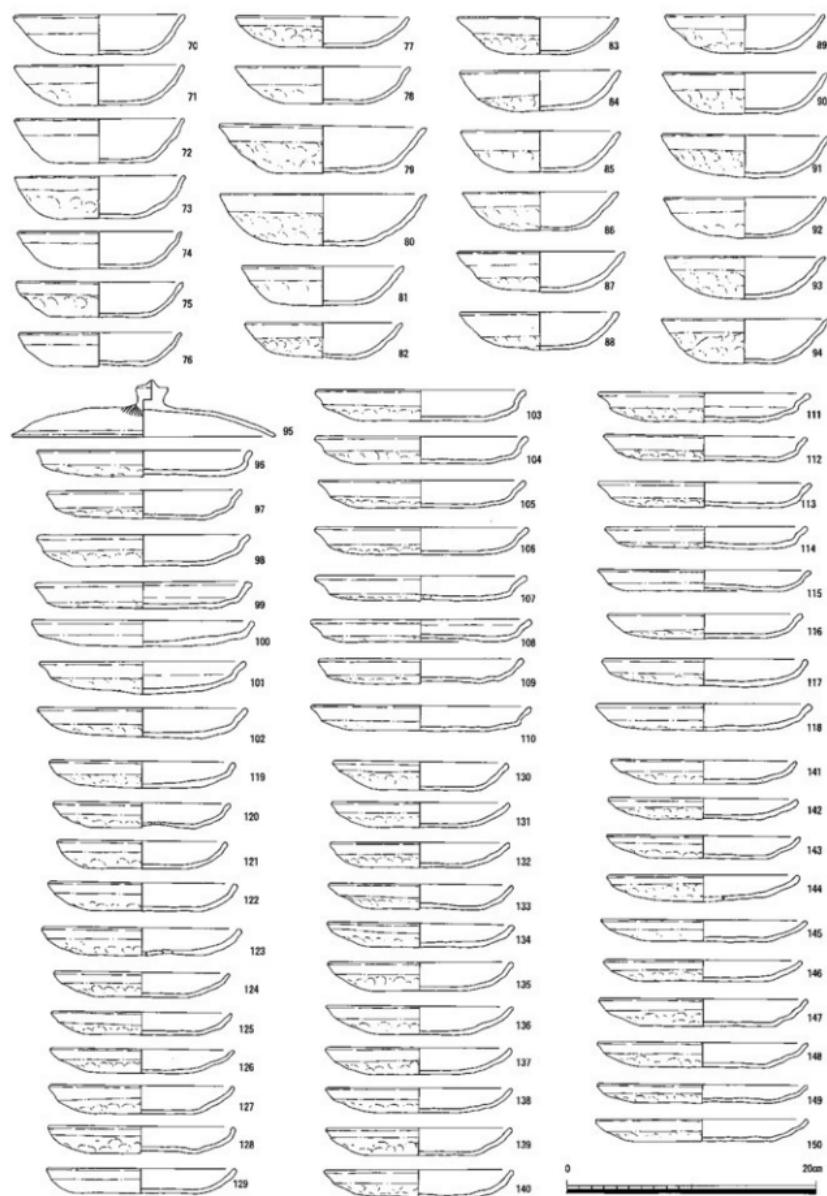
杯Aには肉厚で、底部から体部への屈曲が強い（12・13）のようなものや器壁も薄く、体部から口縁部が緩やかに外反していく新相のものまで型式間の幅が看取されるが、主体となるのは依然器壁の厚みを保つつつ体部から口縁部の反りがややルーズな外開きになる平安時代前Ⅰ期の特徴を有するものである。口径は13cm程度から約16cmまでの幅があり、法量的には口径13～14.5cm程度のものと、14.5～16cm程度のものの大小の二形式が想定されるが、径口指數（器高÷口径）は0.20を中心に分布している。なお、（12）は大きな亀裂がみられ、被熱による可能性も考えられる。また、（47）には底部に直径3.5mm程度の焼成後穿孔がみられる。

杯B

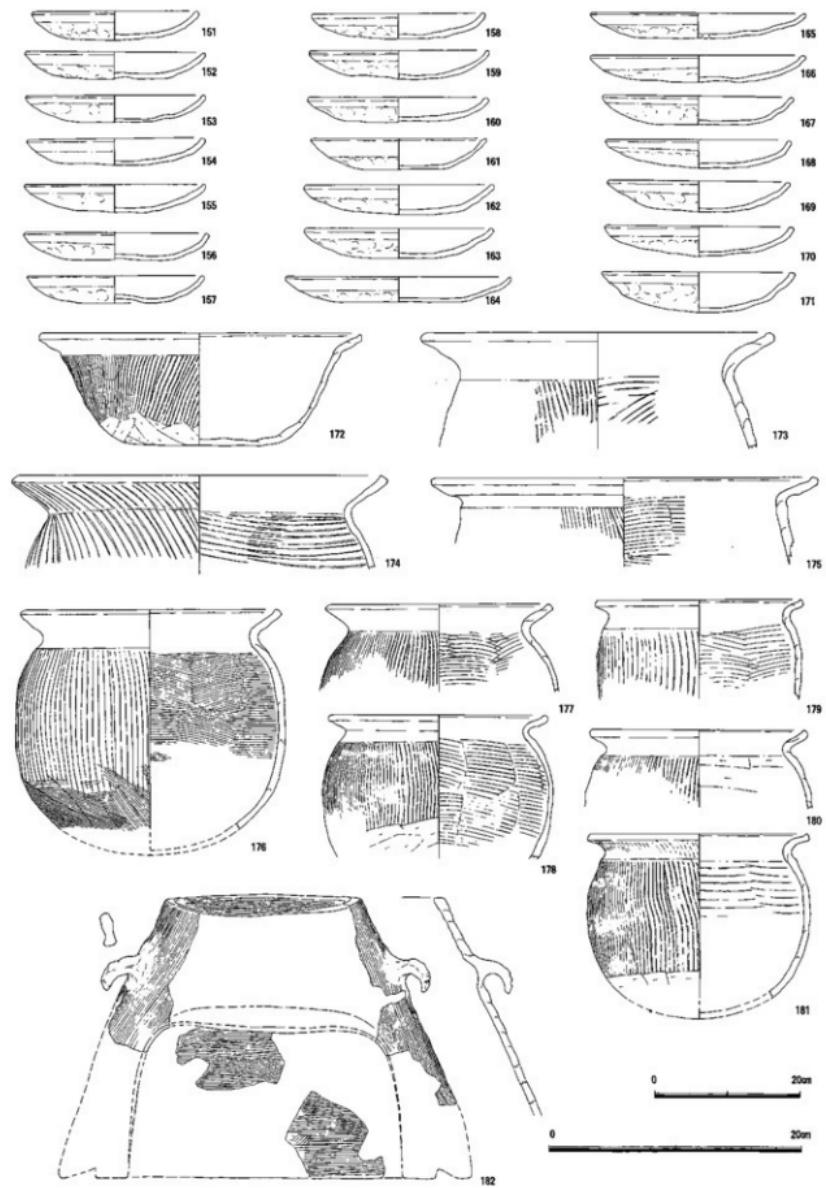
杯Bは大部分が直径約12～14cmの中に収まり、杯Aよりやや小振りとなる。径口指數でみてもおよそ0.23を中心に分布し、先に見た底部の形状で差は表れない。ただし口径が（79・80）のように16.7cmになる大型のものや、（54）のような10.4cm程度の小型のものも少量みられる。また、（48～53）の粗製椀は底部から体部の変換点付近をはじめ全体に厚く、胎土には砂質が多く、色調もにぶい橙色系で粘土板接合痕が明瞭に



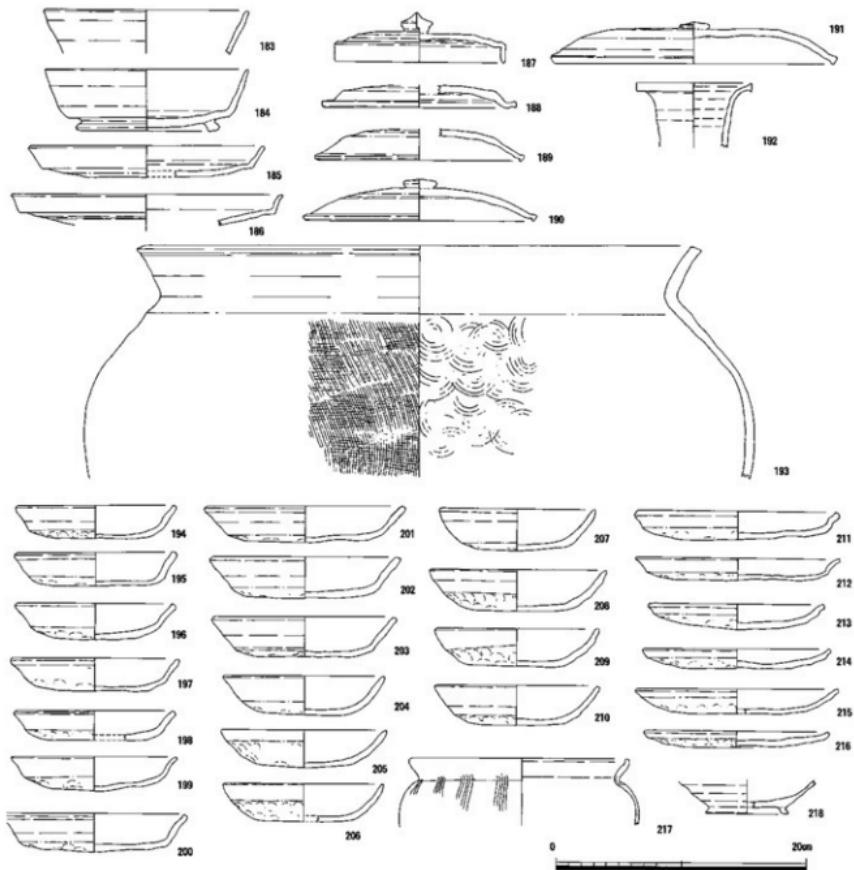
第5図 第124次調査 遺物実測図 S K 8057 : 1~11 S K 8088 : 12~69



第6図 第124次調査 遺物実測図 S K 8088 : 70~150



第7図 第124次調査 遺物実測図 SK 8088 : 151～182 (182のみ 1:6)



第8図 第124次調査 遺物実測図 SK 8088 : 183~193 SK 8084 : 194~218

残るものもあるなど、杯Bとは明らかな差異が看取されるものの、口径・器高等の規格では杯Bと大差ない。斎宮跡周辺の土師器生産遺跡では、奈良時代後期までしか粗製碗の生産の実態が把握されていないが、SK8088の資料は完形に近いものが多く、杯Bに対し約2割の出土量がある事から、奈良期の混入の可能性は低いと考えられる。

皿類

皿Aは口径15~18cmの幅があり、(96~100)のように形式的に前段階のものとみられるものも若干含まれるが、径口指數でおよそ0.20を中心に分布し、全体に法量的には区分は認められない。それに対し、皿Bは口径約14~16cmのものと16~18cmのものの大小二形式がある。全体に皿Bの方がやや小振りとなる。大型のものは径口指數およそ0.11、小型のものはおよそ0.14を中心に分布する。皿Cにも皿Bとほぼ同様の大小二形式があるが、径口指數が大型のもので0.12、小型のもので0.17前後とやや器高が高い傾向がある。なお、(120・165)には直径4mm程度の焼成後穿孔がある。

供膳具の他に土師器では平底鉢(172)、壺(173~181)、竈(182)がある。

平底鉢

(172)は底部から体部が緩やかに開くように延び、やや内弯気味で端部をつまみ上げた口縁部をもつ。外面は体部に粗いタテハケ調整を施し、底部はケズリで整形される。内面は不明瞭だがナデ調整とみられる。

壺類

長胴壺とみられる(173~175)と、小型壺の(176~181)がある。長胴壺はいずれも口縁部ヨコナデ調整で端部が肥厚し、外面粗いタテハケ、内面横方向を中心としたハケ調整が施される。(175)は口径の約1/5しか残存していないが、肩のはらない体部から口縁部が直角に近い角度で屈曲し、頸部は強いヨコナデ調整のため凹線状になる。

中・小型壺は口径21cmの(176)と、およそ17cmを中心とした(177~181)に分けられる。基本的には口縁部ヨコナデ調整、体部外面タテハケ、内面ヨコハケで調整されるが、底部外面は不定方向のハケ調整のもの(176)とケズリ調整のもの(178・181)があり、内面調整も板ナデを施すもの(180)もある。

竈

土坑内各所で破碎された状態で出土している。内外面粗いハケ調整を施し左右一対の把手が付く。破片の一部から焚口の部分に小規模な底があった事が窺われる。

須恵器

杯(183・184)、盤(185・186)、蓋(187~191)、長頸壺(192)、壺(193)がある。形式的にいれども東海系のもので、折戸10号窯式から黒笛14号窯式期に属するものとみられる。

SK8084

土師器杯

一部平安時代前II期の遺物を含むものの、主体は前I期のもので占められ、整理箱で7箱分が出土した。杯類は比較的小型の口径12.5~13.5cm程度のもの(194~198、203~207・209・210)と14~16cmの大型のもの(199~202・208)に明瞭に分かれる。杯A(194~203)は径口指數が0.20、杯B(204~210)はおよそ0.24を中心に分布する。杯Aは底部から体部にかけての屈曲が強く、器壁がやや厚手で、前I期でも古相のものが多い。

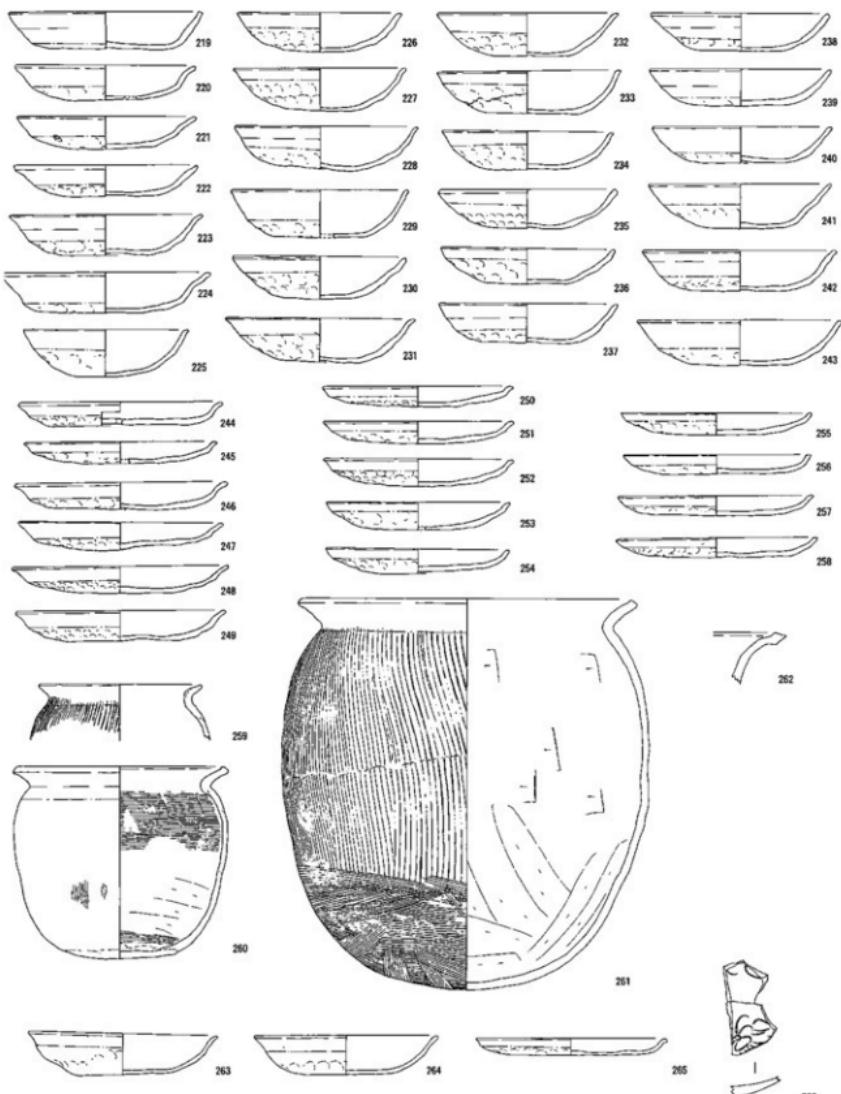
皿 甕

皿類は皿A(211・212)と皿B(214~216)があるが、(213)のように両者の中間的な形態のものもある。

(217)は口径約18.0cmの中型の甕で、立ち上がり気味の口縁部の端部を内側に丸くおさめ、体部外面には間隔をあけて粗いタテハケが、内面はナデ調整が施される。供膳具のものに比して新相を示し、混入の可能性もある。

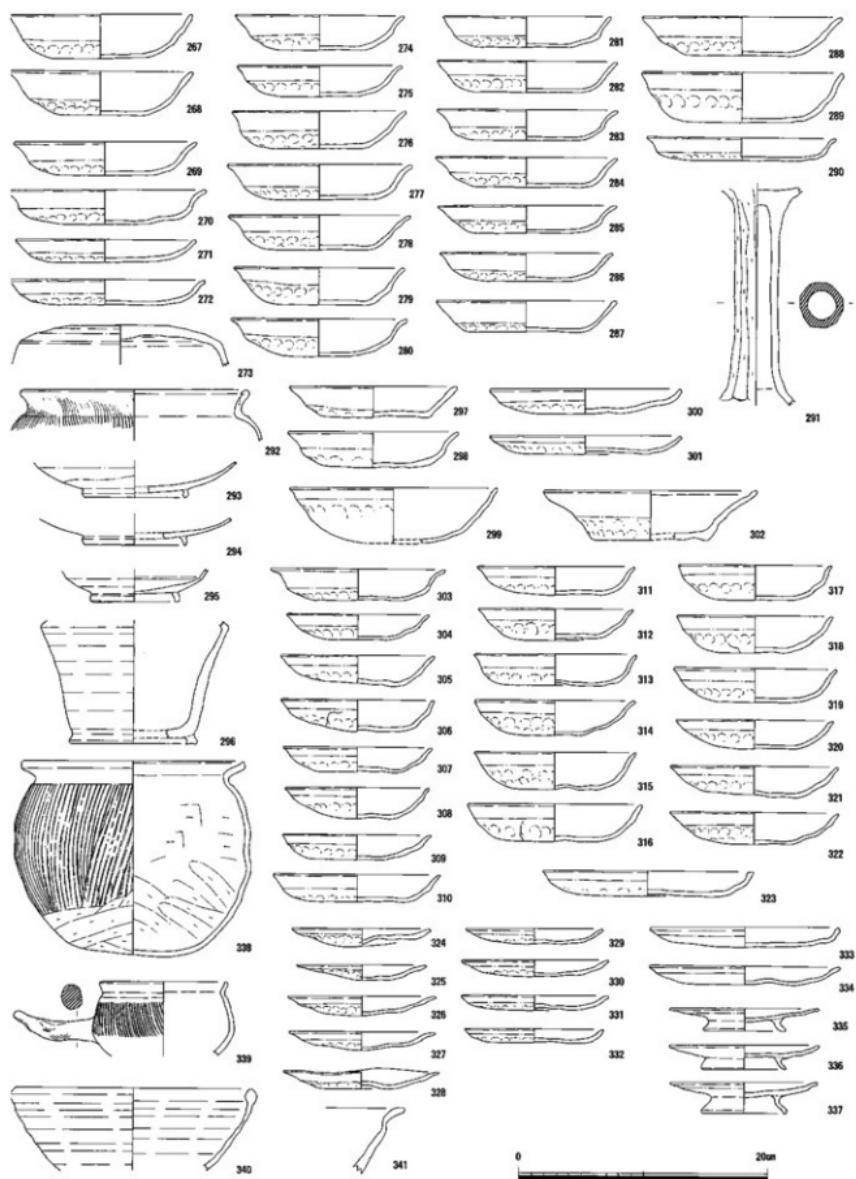
須恵器碗

(218)は平らな底部から体部が直線的に開くもので、外方へ踏ん張る形状の脚部を



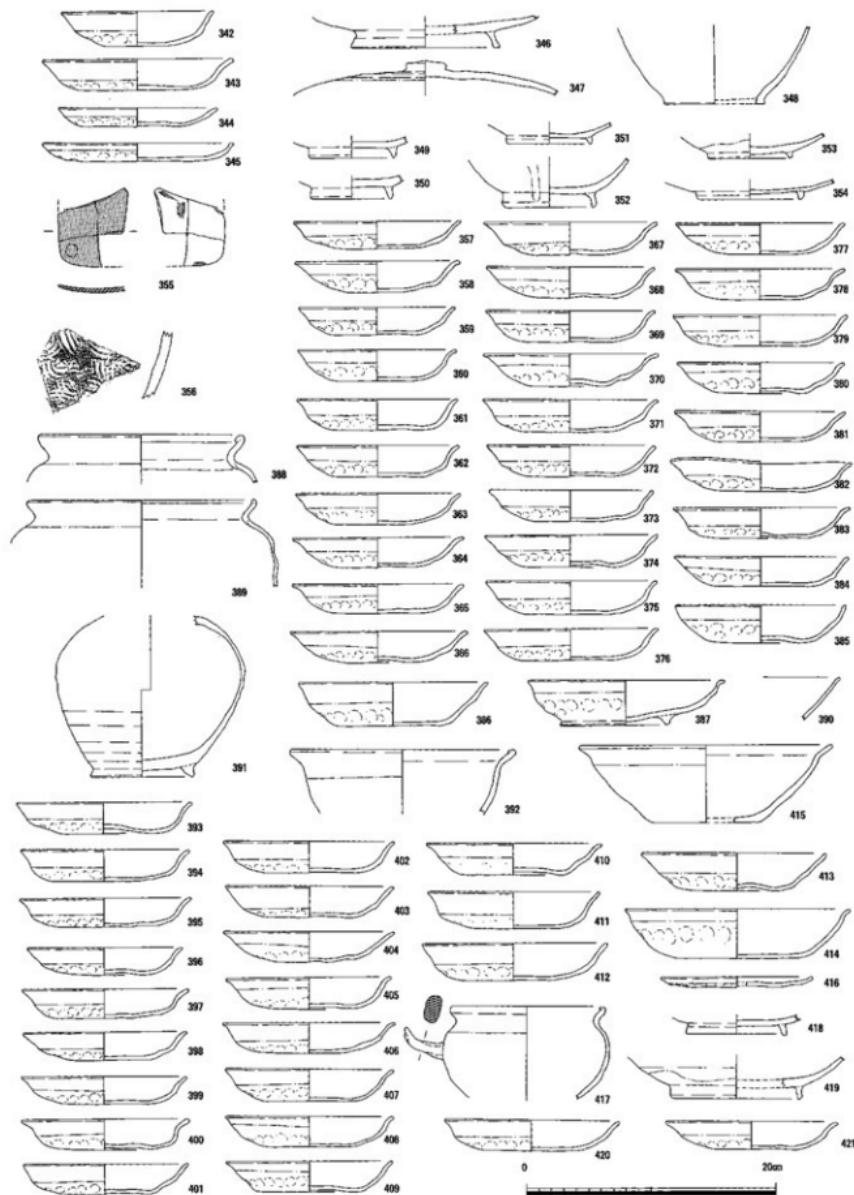
第9図 第124次調査 遺物実測図 SK6792:219~262 SK6794:263~266

		持つ。底部外面には糸切り痕が残る。
(2) 平安時代前Ⅱ期の遺物		
SK6792		この段階の資料は一定量出土しているが、第44次・第109次調査などの鍛冶山西区画の北西部に比較すると、調査区全体の量的割合は多くない。
土師器杯		平成5年度の第98次調査で一部検出されている。土師器杯には杯Aと杯Bがある。整理箱で12箱分の遺物が出土した。
皿		杯A (219~224) は口径14~16.5cmまでの幅があるが、大小の区別は看取されず、径口指數で0.20を中心とまる。杯B (225~243) は杯Aより口径がやや小さく、13~15cmの範囲にほぼ収まる。また全体に器高も杯Bの方が高いが、前段階のSK8088などと比べるとその差は小さくなっている。(221) には直径約4cmの焼成前穿孔がある。
壺		皿A (244~249) と皿B (250~258) があるが、法量上の差は見いだし難い。径口指數でもほぼ0.12で揃う。(244) の底部には直径約5mmの焼成前穿孔がみられる。
須恵器壺		小型壺 (259・260) と、中型の甕 (261) がある。(261) は長胴甕の系譜をひくものと考えられ体部外面を二段の粗いタテハケ調整を、底部は不定方向のハケメを施す。内面は上半を横方向の板ナデ、下半を上方向のケズリ調整で整形する。
(262)		は広口壺類の口縁部とみられるが、端部を断面蛇頭形に肥厚させる。
SK6792		SK6792は、第98次調査区内での遺物出土量は少なく、今次調査区内でも特に埋土下部で多量の炭化材とともに遺物が集中してみられた。ただし土坑埋土上層と下部で明確な時期差は認められない。施釉陶器は出土していないが、土師器杯・皿類の形態から平安時代前Ⅱ期でも古段階 (SK3714併行) に位置づけられる。
綠釉陶器		SK6792同様、第98次調査区の延長を確認した。土師器杯・皿の他、内面にシャープな陰刻花文を見込み底部とその脇に施した緑釉陶器椀 (266) が出土している。釉は光沢のある淡緑色で、黒笛14号窯式期併行のものの混入であろう。
SK8089		(273) は口縁部を欠損するが、内面のロクロナデ痕が比較的平滑に仕上げられているため蓋とした。天井部外面はロクロケズリが施される。
須恵器蓋		平安時代前Ⅰ期の掘立柱建物が廃絶した後に掘削された溝の下部に投棄された資料である。溝埋土上層には平安時代中期の資料も混在するが、主体となるのは平安時代前Ⅱ期のものである。整理箱で8箱分の遺物が出土した。
SD8063		供膳具の土師器では、杯A (274~288) と杯B (289) があるが、形態上の区別はかなりくずれている。杯Aは口径13~15.8cmで、器高はおよそ2.5~3cm、径口指數は平均で0.18程度で、器形の大小は見られない。SK6792などと比べて低平化の傾向は窺える。色調もやや淡橙色がかった明るいものが多い。
土師器杯		高杯の脚部 (291) が出土している。脚部の直径は約4.5cmで外面には乱雑ながら面の面取りが縱方向に施される。
高杯		(292) は口径約18.0cmで、口縁端部は内側に丸くおさめ、外面に粗いタテハケ調整を間隔をあけて施す。
甕		灰釉・綠釉陶器
		灰釉陶器皿 (293・294)、綠釉陶器稜椀 (295) がある。高台は (293) が端部を丸く收め、(294・295) が断面三日月形で施釉は漬け掛けで、黒笛90号窯式の新しい段階のものとみられる。



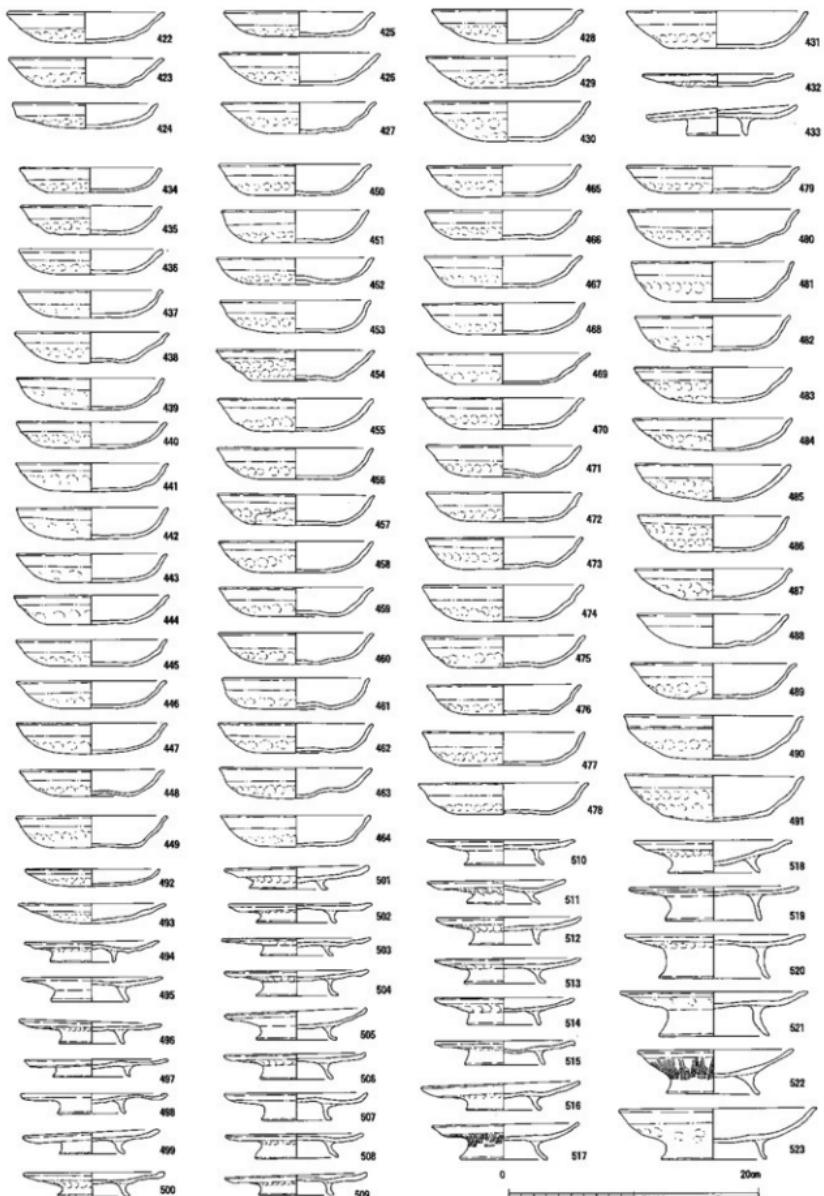
第10図 第124次調査 遺物実測図 S K 8065 : 267~268 S K 7930 : 269~272 S K 8089 : 273
S K 8063 : 274~296 S K 8071 : 297~337

須恵器壺 SK8071下層	(296) は長頸壺の体部である。灰褐色を呈し、焼成はやや軟調である。
	埋土が上下の2層に区分された土坑で、下層の平安時代前II期に属するもの(297~302)をSK8071下層とした。土坑の掘形の相違は判然としなかった。土師器杯A(297・298)、杯B(299)、皿B(300・301)、粗製の鉢(302)が出土している。(302)は口縁部を幅広くヨコナデ調整し、底部外面は無調整である。
SK8093	調査区東部の大型の土坑からの出土遺物である(342~356)。他の土器溜まり土坑では完形品やそれに近い大型破片が重なって出土しているのに対し、この土坑は細かく破碎され、破断面も磨耗したものが多く、遺構の規模の割に出土量は8箱分と少ない。土器が廃棄される土坑の性格差が想定される。
灰釉陶器	遺構の項でも述べたが遺物の器種は多様である。灰釉陶器(349~354)は施釉はすべて漬け掛けで、高台部の断面の形状が三日月形から台形に近い形まで幅があり、東海の生産地の編年で黒窯90号窯式から折戸53号窯式期までの幅が看取される。本土坑への土器投棄が平安時代前II期の新しい段階から中期の初めにかけて行われたものと考えられる。
	特殊な遺物とされるものでは、黒色土器の風字硯(355)があるが、脚部は欠損し、磨耗のため表面の調整は不明である。(356)は須恵器の甕片で、内面に同心円の中心に十字を刻んだ車輪文状のタタキ目が施されている。
(3) 平安時代中期の遺物	遺構の項でも述べてきたが、今回の調査では、平安時代中期~後I期の初頭にかけての土器溜まりの一括資料が極めて多く、斎宮内院部でのこの段階の変遷を考える上で貴重な資料群といえるものが多い。これまでの調査で、平安時代中期を境に建物がほとんどみられなくなっていく鍛冶山西区画での平安時代中期後半前後の資料は斎宮全体の大きなターニング・ポイントの指標ともいえるものである。
SK8058	調査区中央部の小規模な土坑で、整理箱で6箱分の遺物が出土している。
土師器杯	この段階になると杯Aと杯Bの区分は困難になる。(357~384)は口縁部を強くヨコナデ調整して外反させる点から杯Aの延長上に位置づけられようが、底部から体部にかけての境は不明瞭で、内湾気味に丸味を帯びる。(385・386)は杯Bの延長として区分した。杯Aは口径が12.5~14.6cm(平均約13.6cm)で、器高は2.5cm前後に集中し、器形の小型化が進む。また大小の形式差はない。径口指数は0.18前後である。
	杯Bはいずれも径口指数0.23前後で杯Aより深く、杯A系譜のものに対して大型になる傾向がこの段階から定着していく。この両者について口径で標準偏差を算出すると約0.5)でバラツキも少ない。(387)は台付杯だが、杯Bに断面逆台形の高台を付したものである。
皿 甕	土師器皿はほとんど破片も無く、実測できるものもなかった。
	(388・389)はいずれも口縁端部を丸く内側におさめるもので、口径は各々16.0cm、18.0cmである。(388)の体部外面には粗いタテハケ調整が残る。
灰釉陶器	甕(390)、壺(391)がある。(391)は全体に粗いロクロナデ痕が残り、体部外面下半は粗いロクロヘラケズリを施す。底部はロクロヘラ切り痕が残る。全面に釉薬が掛かり、部分的にたっぷりとした釉ダレがみられる。
黒色土器	大鉢(526)の破片が出土しており、SD6750の破片に接合する。



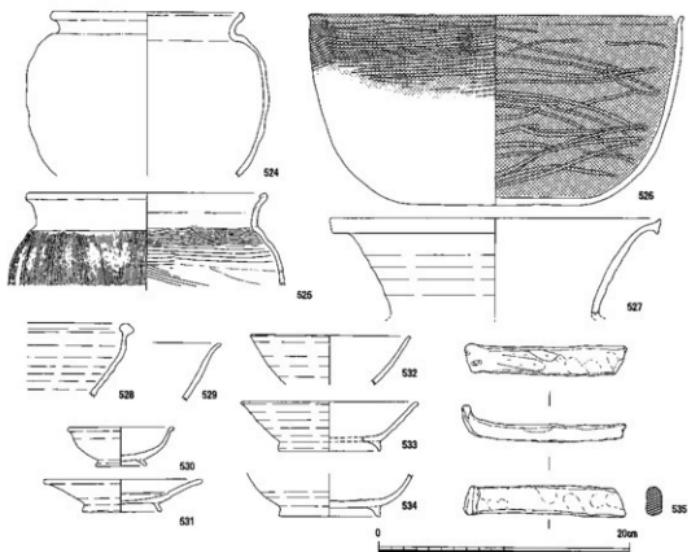
第11図 第124次調査 遺物実測図 S K8093 : 342~356 S E8058 : 357~391 S K8094 : 392 S K8059 : 393~421

SK8059	SK8058に隣接する土器溜まり土坑で、重複関係からSK8058より新しい。整理箱で4箱分の遺物が出土している。
土師器杯	杯A（393～413）と杯B（414）に分類したが、既に両者の形態差はほとんど無いものと考えられる。杯Aは大型品（393・395・412・413）も含むが、大部分はSK8058と同一規格のものである。杯Bの形態のものは大型で、口径17.8cm、器高4.0cmである。
皿	杯に比べ少量である。（416）は口縁部をわずかにヨコナデするが、体部と底部の区分はなくなっている。
把手付甕	（417）は口径約12cmの小型の鍋の体部に、牛角状の把手を一本、内面からソケット状に接合したものである。外面の調整は磨耗のため明らかではない。斎宮においてもこれまで出土例の知られない器種である。
平底鉢	（415）は口縁部を緩やかに外曲させる。口径約20.0cmに対し底部径約8.6cmと口径の広がりが大きい。内外面ナデ調整される。
灰釉陶器	椀の高台の断面形が逆台形（418）ないしやや崩れた三角形（419）で、東海地方の編年観で折戸53号窯式（大原2号窯式）期のものとみられる。
SK8094	（392）は口径約18.0cmの小型の鉢である。口縁端部を内側に丸く肥厚させ、内外面はナデ調製される。
土師器鉢	
SD8069	区画溝の廃絶時に投棄された資料である（422～424）。整理箱で3箱出土している。大部分は土師器杯類である。漆の皮膜が付着した土師器片がある。
SK8072	区画溝の角の部分に掘削された土坑である。大半が土師器杯・台付皿類で、整理箱で3箱分の遺物がある。杯A系譜のものと杯B系譜のものの区別は判然としない。はとんど円盤状に退化した皿（432）を伴う。
SK8071上層	平安時代前Ⅱ期の土器溜まり上に重複する中期の土器溜まりである（303～340）。
土師器杯	（303）は杯Aで前代のものの混入と考えられるが、以下のものは杯Aと杯Bの区別は明瞭ではない。杯類は口径11.5～14.0cm（平均12.7cm）、径口指数は0.19前後である。
皿	（323）は混入の可能性があるが、口径10.5～12.0cmの小型のもの（324～332）と、15cm前後の大型のもの（333・334）がある。
甕	口径約18cmの中型の甕（338）がある。口縁端部を軽くつまみあげ、体部外面は上半が粗いタテハケ調整、底部はヘラケズリ、内面は上半を板ナデ調整、下半をヘラケズリする。形式的に前代のものの混入の可能性がある。
把手付甕	（339）は口径10.0cmで、短い「く」の字状の口縁をもつ小型の甕に長さ約7cmの牛角状の把手が一本付くものである。
須恵器鉢	（340）は玉縁状口縁をもつ須恵器鉢で、京都篠窯系のものである。内齊気味の体部にはやや粗雑なロクロナデ痕が残り、口縁部も玉縁状に肥厚する程度の「潰れ玉縁」と呼ばれるものである。平安京の土器編年でⅢ期古段階から現れる形式である。生産地では西長尾5号窯跡出土資料と同形式とみられる。
SD6750	第98次調査でも確認された土坑状に落ち込む溝で、埋没時に投棄された状態で大量の土器が出土した。出土量は整理箱で17箱に及び、大半が供膳具の土師器である。
土師器杯	今回の出土資料を見てみると、土師器杯類の形態上の区分はほとんどみられないが、（483～491）のように底部を丸く作るタイプが目立つようになる。径口指数は、全体で約0.20になる。口径は11.2～13.8cm（平均約12.3cm）で、標準偏差は0.57である。

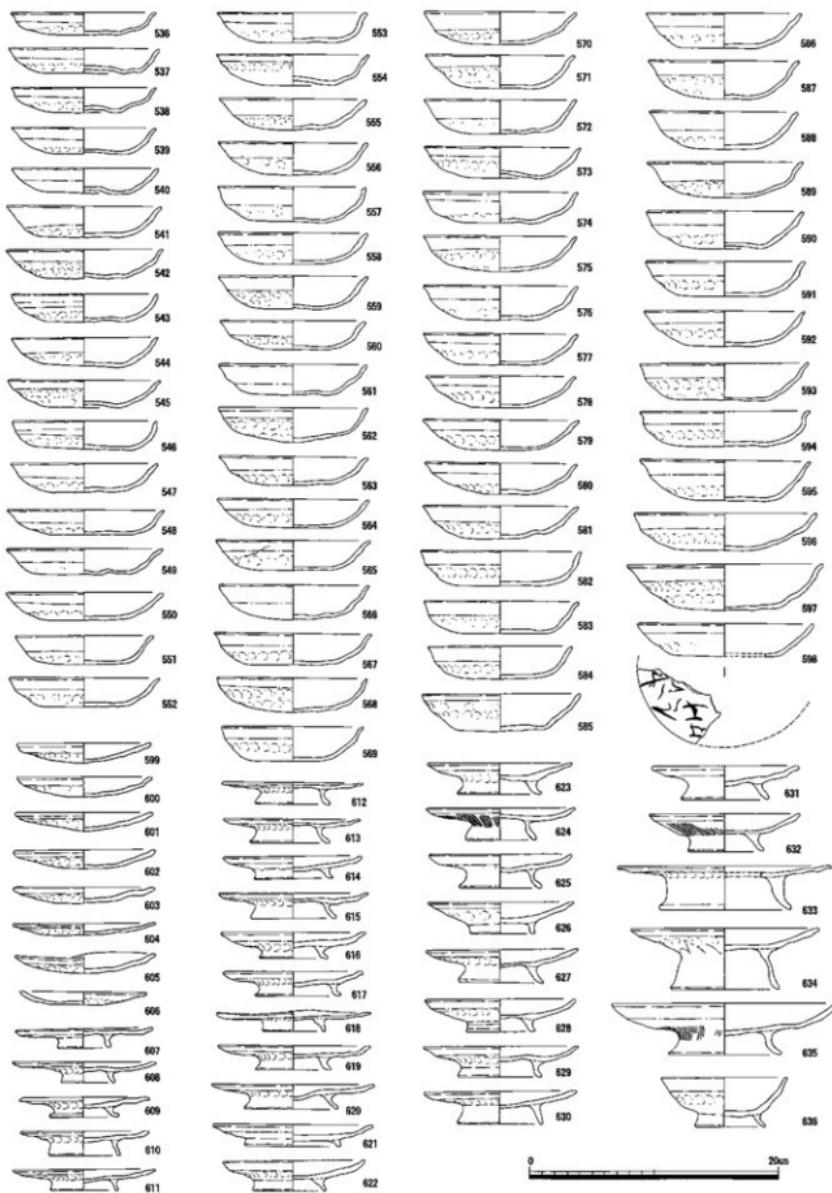


第12図 第124次調査 遺物実測図 S K 8069 : 422~424 S K 8072 : 425~433 S K 6750 : 434~523

- 台付皿
器高が低くかなり円盤状になった皿(492・493)もあるが、大部分は台付皿になる。口径10.8~12.0cmほどの小型品(494~515)と、12.0~15.0cmの大型品(516~521)がある。皿部と高台部の接合は粗雑である。
- 台付杯
(522・523)がある。(522)は外面に高台接合のための粗いハケ調製が残る。(523)は口径15.7cmあり、杯としても大型である。
- 甕
(524)は口径約15.2cmで体部内外面ナデ調整、(525)は口径約19.0cmで、体部外面タテハケ調整、内面ヨコハケ調整される。いずれも口縁端部を丸く肥厚させる。
- 黒色土器鉢
(526)は口径29.8cm、器高15.4cmの大型の鉢で、口縁端部をかるく外反させる。底部はやや平底気味で、口縁外面と内面全体に粗いヘラミガキを施し、この範囲が黒化処理されている。斎宮跡では類例のみられない器種である。
- 須恵器鉢
(528)は玉縁状口縁を持つ鉢で、京都都窯系のものである。SK8071上層の(340)に比べて口縁端部の折り返しが強く、形式的には黒岩1号窯跡出土資料に相当するものとみられる。平安京ではⅡ期新段階からⅢ期中段階頃までみられる資料である。
- 灰釉陶器
椀がある。高台はやや内弯気味になる三角形(533)で、東海地方の編年観で黒雀90号(光ヶ丘1号)窯式から折戸53号(大原2号)窯式期に相当するとみられる。
- 綠釉陶器
(530)は口径8.4cmの小型の椀で、釉はかなり剥落し、(531)は濃色の釉が部分的に斑状に掛かり内面は段を持つ。これらの素地は硬質で、東濃系のものとみられる。(534)は高台部底がわずかに沈線状にへこみ、素地は軟質で近江系とみられる。
- 貿易陶磁
(529)は越州窯系青磁椀で、口縁部のみの出土である。均質にオリーブ色の釉が

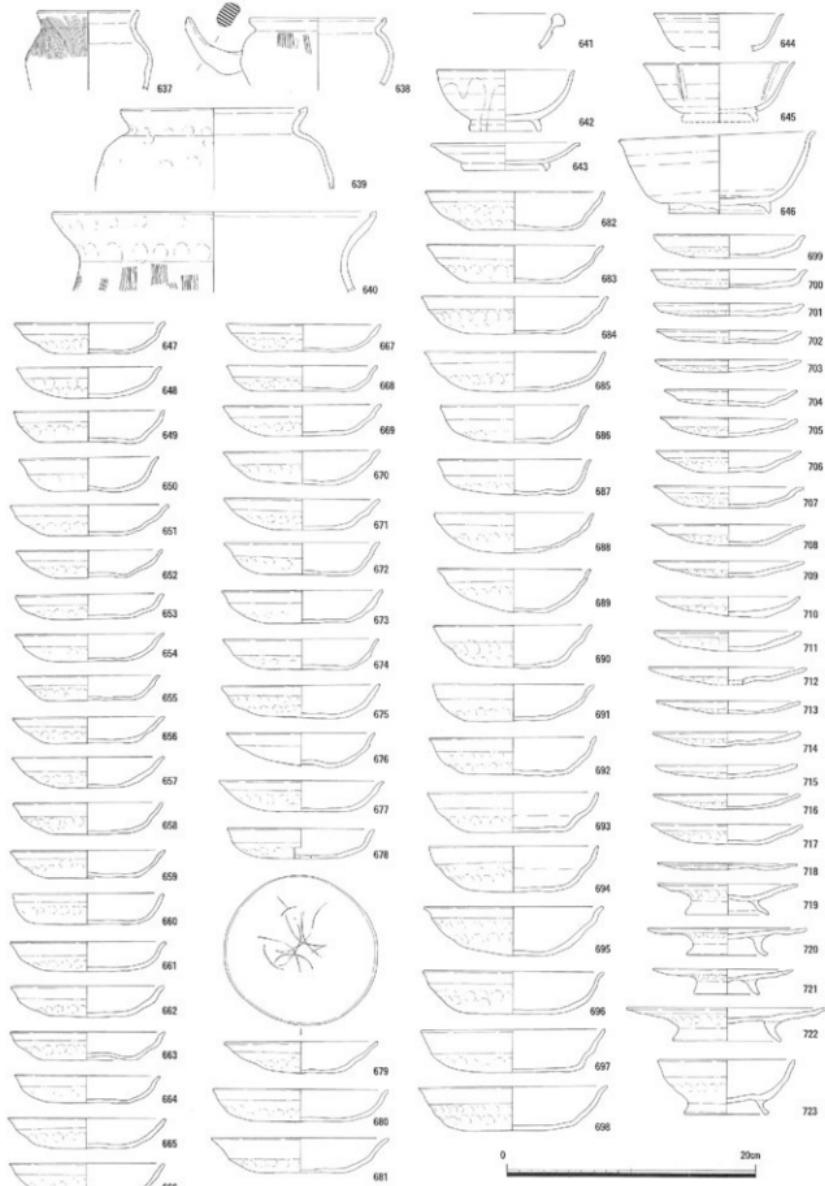


第13図 第124次調査 遺物実測図 S K 6750 : 524~535



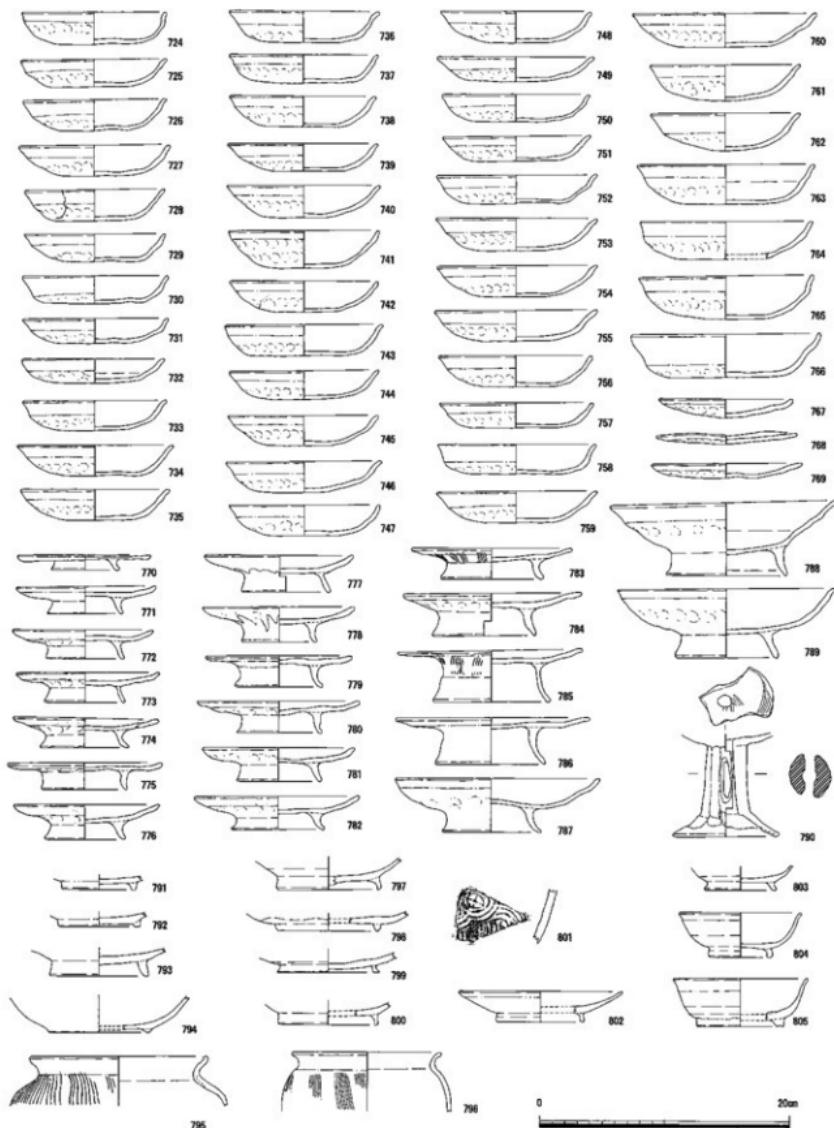
第14図 第124次調査 遺物実測図 S D1460 : 536~636

	掛かる。第109次調査出土の破片と酷似する。
不明土製品	(535) は端部が孫の手状に曲がった棒状土製品で、一端が欠損する。幅約 2cm、厚さ約 1cm で、端部には棒状工具による穿孔がみられる。先端部に磨耗がみられ、被熱の痕跡もみられ、火搔き棒などの用途が想定される。
SD1460 土師器杯	埋土の重複関係では SD6750 より新しいが、出土遺物は土師器供膳具が大半を占め、ほぼ同様の内容のものである。出土量は多く、整理箱 30 箱分になる。今回出土分でみると、土師器杯類は底部に丸みをもたせており、大小を除き一部やや深手に作るものもあるがほぼ单一の形式で、口径で 11.0~12.8cm の小型のもの (536~584) と、13.0cm を越える大型のもの (585~588) に分けられる。大半を占める小型品の平均口径は、約 12.2cm、標準偏差は約 0.52 でバラツキは少ない。この径口指数は約 0.2 である。
皿	口径 10.2~11.5cm に収まる小型のものばかりである (599~606)。口縁部はヨコナデ調製し、わずかに屈曲するが全体にはほぼ円盤状になる。
台付皿	皿にそのまま外反する高台を付けたものである。口径 10.0~13.0cm の小型品 (607~632) と、15cm を越える大型品 (633~635) がある。高台に着目すると、小型品には口径に対し高台径の小さなものの (607・608) と、高台径が口径の 1/2 以上になるもの (609~632) があり、大型品は高台の大きさ・形態に大きな幅がある。
椀	(636) は唯一のもので、口径 10.0cm と小型である。手びねりで整形される。
甕	(639) は口縁を内側に丸くおさめる一般的な小型甕だが、(637) は口縁部の屈曲が弱い小型品、(640) は口縁の屈曲が弱く、口縁端部に弱い折り返しが付くもので、斎宮跡では客体的な形式である。
把手付甕	(638) は小型の甕に牛角状の把手を一本付けるものである。外面は粗いタテハケ調製が施される。
灰釉陶器	椀 (642) と皿 (643) がある。椀は高台の断面が弱い三日月形を呈するものの、体部は深く、丸楕形になる。皿は、高台が断面くずれた三角形あるいは台形状になる。釉は漬け掛けされ、いずれも折戸 53 号窯式期の範疇に含まれるものであろう。
綠釉陶器	椀 (644~646) が出土している。(644・645) は硬質の素地で、(645) は輪花状に 3 本の沈線がみられる。東濃系のものとみられる。(646) は深椀で、素地は硬質だが厚手で、高台内面に沈線状の凹みを巡らせており近江系のものとみられる。いずれも釉色は濃緑色で、斑状に微細な濃淡がみられる。
ひらがな 墨書き土器	(598) はひらがな習書とみられるもので、土師器杯体部外面に習書される。部分的に「ん」や、「け」または「は」とみられる文字があるが全体は判読できない。
SK8073 土師器杯	SK8071 に接する土器溜まり土坑で、重複関係上の新旧は埋土の観察でも明確にできなかった。整理箱で 10 箱の遺物が出土した。土師器杯は、口径 12.2~13.2cm の小型品 (647~679) と口径 14cm 以上の大型品 (680~685)、また、底部を深く丸く椀形に作るもの (686~698) がある。小型品に限ってみれば、平均口径は 12.2cm、標準偏差は 0.44 と規格性が高い。(678) は内底面に整形時につけたとみられる植物纖維の圧痕のようなものがある。大型品も口径平均 14.4cm、標準偏差 0.33 と揃っている。椀形のものは平均口径 13.5cm、標準偏差 1.09 とバラツキが大きい。
皿	皿 (699~718) が比較的の破損せず含まれている。口径 11.0~12.6cm の中に収まる。台付皿 (719~722) は少ないが大小二形式がある。



第15図 第124次調査 遺物実測図 S D1460 : 637~646 S K8073 : 647~723

椀	手びねりで作られた口径10.9cmの小型の椀（723）がある。
SD8066	区画施設とみられる溝の最終埋没に伴って投棄された土器溜まり資料である。整理箱で16箱分出土した。土師器杯類は、口径11.2~13.0cmの小型品（724~759）と14.6cmの大型品（760）、底部を丸く深く椀形につくるもの（761~766）に分けられる。
土師器杯	小型品の口径でみると平均は約12.0cm、標準偏差は0.47と規格的に小型化の傾向が強くなる。椀形のものは平均口径13.3cm、標準偏差は1.28ある。しかし径口指数は先述のSK8073の資料とともに0.24で一定している。
皿	円盤状に作る小型の皿がある（767~769）。
台付皿	口径10.7~13.2cmの小型品（770~782）、14.4cm以上の大型品に区分できる。大型品には短く太い高台が付く（783・784）と、高めの高台が付く（785・786）がある。
台付杯	手びねりの杯に高台を付け、浅い椀状に作るものである（787~789）。杯部は内窪するもの（787・789）と直線的に開くものがある（788）。
高杯	（790）は小型の高杯で白色に発色する精緻な胎土を用いる。内部が中空になる脚柱部は12方に面取りを行い、長さ4cmの透かし穴が切り込まれる。
壺	小型の壺がある。（795）は口縁端部を内側に丸く収め、（796）は口縁端部をやや肥厚させ、体部にタテハケ調製を施す。
ロクロ 土師器	椀とみられるロクロ整形の土師器が数点みられる（791~794）。断面台形の太くしっかりした高台を持ち、内底面にロクロヘラ切り痕を残す（791~793）と、小さな高台部を持ち、底面の広い（794）に分けられるが、いずれもこれまでの斎宮跡の発掘調査では確認されていないタイプのものである。
須恵器	高台の付く杯あるいは椀形とみられるものが出土している（797~800）。また、内面に車輪文のタタキ目の付く壺（801）がある。
緑釉陶器	椀（803~805）と皿（802）がある。椀はいずれも小型で濃緑色の釉が掛かり、近江産と考えられるものである。
平安時代中期 の編年	以上各期の遺物について土器溜まり資料を中心にみてきたが、炭化材を伴うものが多く、焼成後穿孔や被熱による可能性がある亀裂のあるものが少なからず今回の調査では確認されている。また、平安時代中期を中心に把手付壺や火搔き棒とみられる土製品など火に関わるとみられる遺物が多数見られる事が注目される。
平安時代中期 の編年	今回の調査では、鐵治山西区画ではまとまった量の平安時代中期の一括資料が出土しているが、口径や径口指数等を分析することで時期的に細分できると思われる。まずSK8058・8059は主体となる土師器杯の口径が13.5cm前後あり、それに対し、SK8071上層・8073、SD1460・6750・8066・8069・8073は、主体となる杯で口径約12.2cm前後となり差がある。なおSK8071上層では、実年代で西暦930~950年頃に比定される平安京III期古段階以降に伴う須恵器鉢があり、「延喜通寶」を共伴した第95次調査のSX6666が平均口径12.7cm（標準偏差0.60）、第99次調査のSX6900が12.3cm（同0.52）である事、また後者のグループから台付皿が多量に含まれる事から、今回の中期の資料群の中ではSK8058等を前半、SK8071上層等を後半とみる事ができよう。
平安時代中期 の編年	なお、後者でも椀形になる土師器杯を後I期に連続するものと捉えると、これを一定量含むSD8066とSK8073の土器群ではSD8066に從来知られるものと形態は異なるもののロクロ土師器が含まれる事から中期後半でも末葉あるいは後I期の基準的資料で



第16図 第124次調査 遺物実測図 S K 8066 : 724~805

ある第37—4次調査のSE2000との中間的な位置づけが可能な資料と考えられる。

(4) その他の遺物

特殊遺物として、平安時代中期の土器溜まりを中心に多くの種類のものがある。

縄釉陶器は186片、墨書き土器は15片、硯類は円面硯片1点と転用硯類4点の出土をみている。墨書き土器ではひらがなを習書したとみられる平安時代中期の資料があり、(814)は「口のころは」と3回ほど流麗な筆致で書いていている。また(815)は多数の文字が想定されるが判読できない。これまで平成4年度の第98次調査などで中期のひらがな習書き土器は出土しているが、明らかに文節を意図していると判断されるものはこれまで少なく、書道史の上でも貴重な資料であろう。

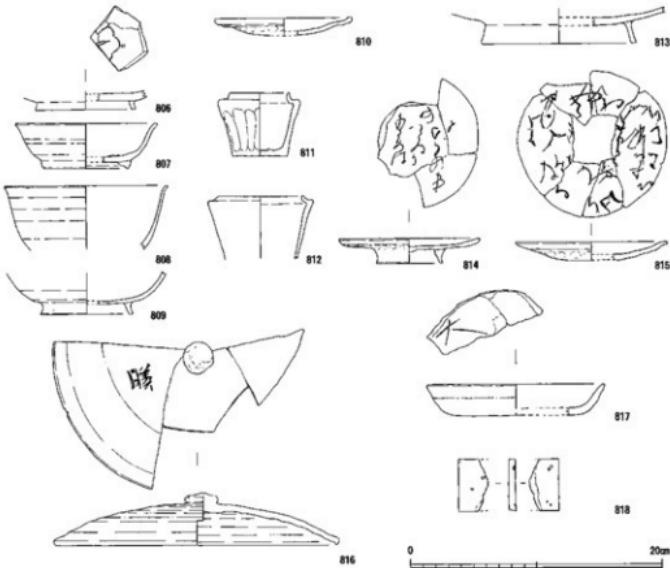
この他、須恵器蓋上面に「膳」と墨書きされたもの(816)があり、同じ鍛冶山地区の第46次調査でも須恵器杯に同様の墨書きが施されたものが出土している。遺物は東海の編年観で折戸10号～井ヶ谷78号窯式期に比定され、平安時代初期頃のものとみられる。また線刻土器では(817)のように土師器杯内面に「大」と読めるものがある。

皿(810)がある。口縁端部を内側に丸く折り返す「て」の字口縁の小皿である。

平城京土師器分類で壺Eとされる小型の容器が目立つ(811・812)。

石帶は、巡方(818)が1点出土している。1/2ほど欠損しており、表面の風化も著しい。製塩土器は志摩式のものが片出土しており、やはり土坑等の土器溜まりからとその周辺からの出土が多い。

牛葉東地区の第108次調査の際にも同様の傾向が認められたが、今回も土錘の出土が48個と多く、今回は図示していないが遺構出土のものも多い。漁労以外の使用方法も



第17図 第124次調査 遺物実測図

検討すべきかもしれない。

4 まとめ

今回の調査で鍛冶山西地区の調査は、近鉄線以北ではおおむね終了したといえる。特に、他の区画にはみられない柵列により構成される二重構造の内郭柵列の東辺を確認し、当区画の最初期の構造について新たな知見を得る事ができた。鍛冶山西区画の変遷については、これまで過去の発掘調査概報等で、その都度試案が提示されていたが、屋上屋を架す部分もあるものの、時期を再検討した主要遺構に今回の調査成果を加えて鍛冶山西区画の変遷を総括しておきたい。

(1) 第Ⅰ期の構造

奈良時代中期までの土坑等に重複して大規模な柵列による区画施設が成立する段階である。区画南辺については調査例が無く現段階では知り得ないが、北辺柵列は東西120m(40間)のSA6760の東端から南へSA6770が延び、SA6760からさらに東へ16間分SA2800が張り出す構造となる。そのため方格地割を構成する区画東辺道路は少なくともこの段階では成立していないかったと想定される。

この期の柵列及び、倉庫と推定される3間×3間の総柱建物SB6740・7385・8090以外の側柱建物は全て柱間寸法10尺(約3m)を基準としている点も後代と異なる。

内郭柵列は今次調査によって東西20間となる事が判明したが、これは外郭柵列北辺のSA6760(40間)のちょうど半分の長さになる。ただし、両者の東西中心軸は一致しておらず、外郭柵列西辺との間隔は8間、東辺とは12間と内郭柵列は西に寄った構造になる。

内郭内側の建物

内郭内では、北西隅に総柱建物SB7375と、今回並立する事が確認されたSB7385・8050があり、この2棟から現在確認されている柱穴で11間分南にSB6840・6841・6842の3棟の側柱建物となるとみられる大型掘立柱が見つかっている。近鉄線以南のデータは依然少ないが、内郭(区画)の中心的建物はこの間に想定するのが現状では妥当と考えられる。

内郭東側の建物

内郭柵列の外側では区画内最大の6間×4間で南北両面庇のつくSB7950が東側に建つ。この周辺ではSA2705に北側柱筋をあわせてSB8090と、そこから北へ30尺分間を開けてSB6740の2棟の倉庫と考えられる総柱建物が建つ。なお、内郭東辺柵列SA8080との間隔はSB7950で2間、SB8050で1間分しかない。また、この部分では斎宮跡最大級の大型井戸SE7920が設けられる。これは、井戸掘形の周囲に一辺約10mの方形の掘り込み地業を行なう、斎宮跡で他に類例の無い特殊な構造のものもある。また、この井戸から延びるように北進して東へ直角に曲がるSD6810はこの段階まで遡る可能性がある。

内郭西側の建物

内郭柵列西側ではSA1411とSA7150の間に納まるように、SB7155・7160の2棟の東西棟が建てられる。内郭柵列北側では積極的にこの時期まで遡らせられる建物は認められない。

SB2790

鍛冶山西地区まで広がるSA2800の囲みの内部については未調査地も拡がっているため解明は進んでいないが、7尺等間の南北棟SB2790が区画北西隅に建てられる。

なお、区画東部の南北柵列SA6770は昨年の第119次調査ではわずかに検出されているが、第124次調査では連続を明らかにする事はできていない。

	(2) 第Ⅱ期の構造
区画の大規模改革 区画道路成立	<p>この段階で鍛冶山西区画はかなり大規模な改変を受ける。まず最大の変化は内郭柵列が消失し、外郭柵列も全体に南へ約2.4m移動するとともに、鍛冶山中区画へ延びていたSA2800も廃絶して鍛冶山西地区の東辺区画道路が成立し、この部分が方格地割全体の構造に整合するようになる。内郭柵列の廃絶に伴い区画内部の建物配置は大きく変わるが、区画施設では内郭柵列SA7150を東へ4.6mずらした位置でSA7400が間仕切り的に設けられる。これは北辺柵列SA6780には接続せず、南端も近鉄線を越えずに途絶している事が判明している。</p> <p>このSA7400の付近では、前代のSB7155が8尺等間（約2.4m）の規模に縮小して5間×2間のSB7190に建て替えられる。また、これと40尺（11.8m）ずつ等間隔をおいてSB2680・2685が建てられる。</p> <p>区画北部では、8尺間を基本とした東西棟がSB7370-1430の後、少し位置を南へずらして、SB7390へと3度建て替えられる。SB1430では南と西に庇が付くが、基本的には同規模程度のものである。この南側にはSB7382-7381-7380とSB8062-8061-8060の8尺等間、5間×2間の南北棟のグループが成立する。SB7370等の建て替えに対応する可能性は考えられる。</p> <p>区画北東部では3間×2間のSB6726とSB6736が桁行の柱筋を揃（そろ）えて並び建つ。これらは各々SB6725と6735に建て替えられる。</p> <p>区画東部では、前代の大型建物SB7950は建て替えられる事なく、その跡地にSB7918-7919とSB7947-7948の組合せで逆L字形の配置を構成する。これらの変更に伴って前代のSE7920はやや構造を簡略化してSE8085に変更される。井戸の南側ではSB7933-7934-8091の順に3間×2間の南北棟が建て替えられる。</p>
SD6810	SD6810はこの段階まで存続すると考えられ、この南北溝の溝心とSA6790、先述のSA7400とSA2675の間隔は約28mでほぼ等しく、SD6810の溝底の絶対高も勾配がみられず、第Ⅱ期では区画溝の性格を強く持っていると考えられる。
建物の小型化 総柱建物消失 土器溜まり出現	<p>第Ⅱ期に入ると、区画西部のように同様の東西棟配置を継続する区域もみられる一方、SA2800の消失と区画東辺道路の成立により、区画自体が西へ縮小し、建物規模も柱間10尺のものがなくなり、柵列による二重構造の消失に現れるように区画全体の求心性が弱くなる。また、この段階では前代のように倉庫と推定されるような総柱建物も廃絶し、所謂「土器溜まり」と呼ばれる土師器供膳具を中心とした土器の大量投棄場が出現するのも現在の知見ではこの時期である。ただしその分布は区画の北東と北西の柵列の際などに限られ、それ自身が祭祀や饗宴の場とは考えられず、何らかの使用後の廃棄場所と考えるべきであろう。また、区画北部及び中心部付近には土器溜まりは認められない。</p>
区画溝による	(3) 第Ⅲ期の構造

今回は昨年度の第119次調査概報とは段階区分が異なるが、特に区画北部の建物配置の大きな変更に注目して画期を再検討した。

SA7400の後にSA7170・7171・7172が南へ延長して設けられるなど、基本的には前段踏襲しつつ、部分的にはいくつかの変更がみられる。

区画北部では、小土坑を「コ」の字形に連続させて新たに区画が設けられる。内々

細分

で東西約49m、SA6780との間隔は約35mである。この区画内部には從来このエリアが東西棟を主体としてきたのに変わって5間×2間を規模の基準とする南北棟がSB7412-7411-7410とSB6722-6721-6720の東西の2つのグループに分かれて認められる。未発掘ではあるが、この中間にもう1つのグループも想定し得る。なお、今回の調査では、東と南にこの溝に平行するような同規模の連続する土坑状の溝がみつかっており注目されるが、第105・109次調査では同様のものは確認されていない。

区画西部では、SB7191が前段階のSB7190を踏襲して同一規模で建て替えられるものの、その北側では東面庇をもつ南北棟SB2690に変更される。

区画東部の建物配置

区画東部では、依然「L」字形の建物配置が認められ、東西棟がSB7915-7916-7917の南面庇付きの5間×3間の建物、南北棟はSB7938-7939-7940の西面庇付きの4間×3間の建物で構成される。この北側にも南面庇付きのSB6730-6731-6732の3間×3間の建物がみられる。ただし、これにより第Ⅰ～Ⅱ期には存続した大型井戸は、少なくとも区画北東部からは消失する。規模や造作の点で斎宮跡の他地区の井戸とは際立ったものでだけに、この井戸の魔絶は大きな意味を持っているだろう。

先述通りSA7170・7171・7172はSA7400を踏襲して設けられているが、南へ大きく延長されており、これまでに23間分まで確認されている。しかしこれによる区画内の機能上の変化については、区画南の調査例が少ない事もあって判断できない。

この時期にも、区画の北東と北西では大小様々な「土器溜まり」土坑がみられる。その中で最大級のSK2650もこの段階に属するものとみられる。しかしながら区画北部の「コ」字形区画内には目立った土器溜まりは存在しない。

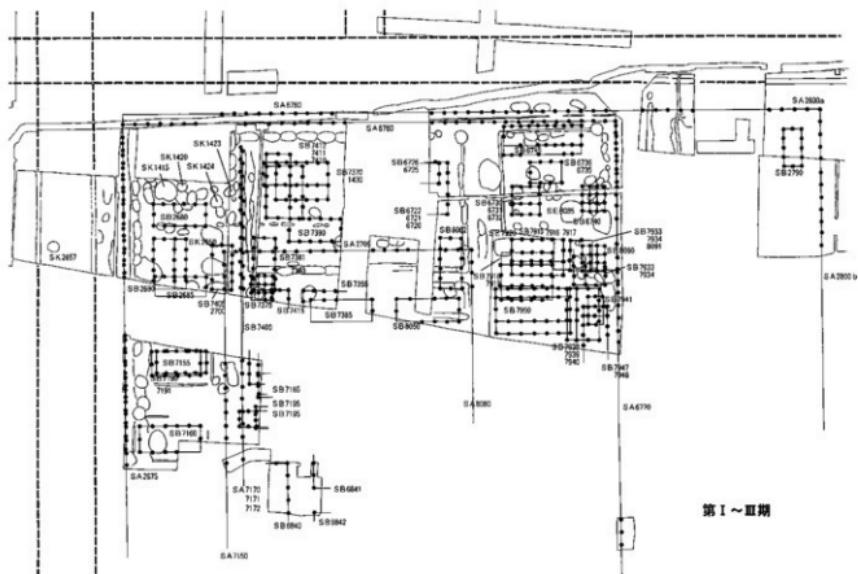
鍛冶山西区画は第Ⅲ期以降急速に衰退し、第98次調査区や第109次調査区にわずかに残る小規模なものを除いて建物はほとんどみられなくなる。「土器溜まり」遺構も平安時代中期末葉頃のものを最後としており、当区画の機能低下を示している。

(4) 鍛冶山西区画における課題

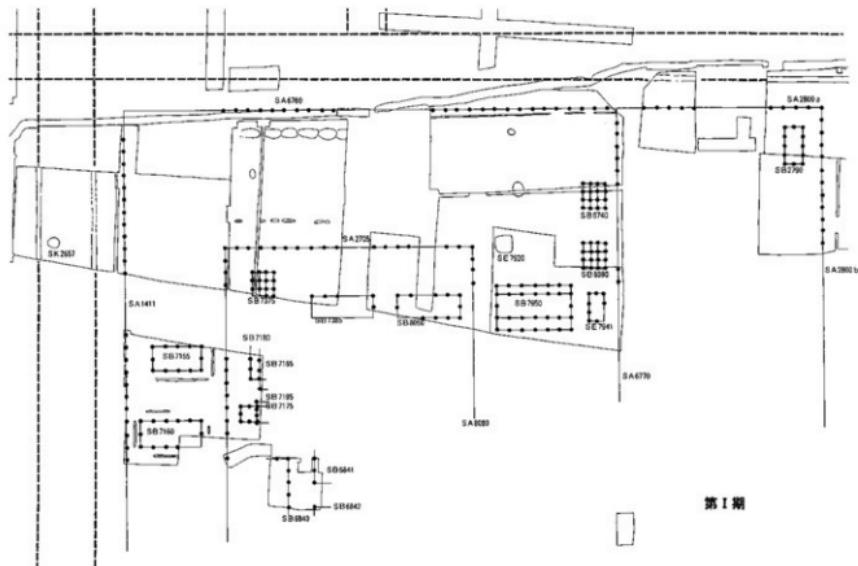
各期の時期

以上、鍛冶山西区画の変遷について、今次調査の知見を踏まえて整理した。この3段階の具体的な時期については、平成9年度の第119次調査の概要報告の中でもふれられてているが、第Ⅰ期は斎宮跡の土器編年で奈良時代後期に比定される。第Ⅱ期については、柱穴出土の遺物の検討結果と、この段階で最も新しいとみられるSB7380やSB8062が平安時代前Ⅱ期の溝や土坑に重複されており、平安時代初期から平安時代前Ⅰ期頃に比定され、第Ⅲ期はこの区画の建物の消失していく時期も勘案して、平安時代前Ⅱ期～中期におおむね比定できよう。

第Ⅱ期及び第Ⅲ期は、それぞれ3回程度の幅で掘立柱建物の建て替えが行われている事がわかる。また第Ⅰ期は外郭柵列SA6760と内郭柵列SA2705が外郭東西長で40間、内郭で20間と規模の上での整合性が高いにも拘わらず内郭が西に寄った構造となっている事、身舎の桁行柱筋を揃えるSB7385・7950・8050の建物群に対し、SA8080がSB8050と1間分しか離れておらず、やや不自然な事などから、第Ⅰ期の中でも少なくとも2段階程度の変遷が想定され得る。今回の調査の中で、南北柵列SA6770は確認されなかったが、少なくとも第119次調査区の中でもその延長は決して明確な形では確認されていない。あるいはSA1411・6760・2800の外郭柵列が先行し、内郭柵列及びこのSA6770が東西長で2:1となるよう後に付設されたと想定すれば、SB7950とそれに並ぶ

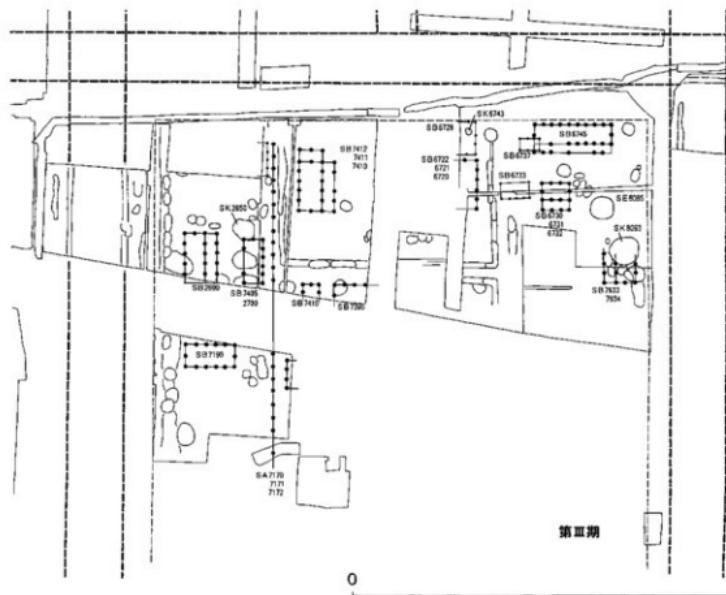
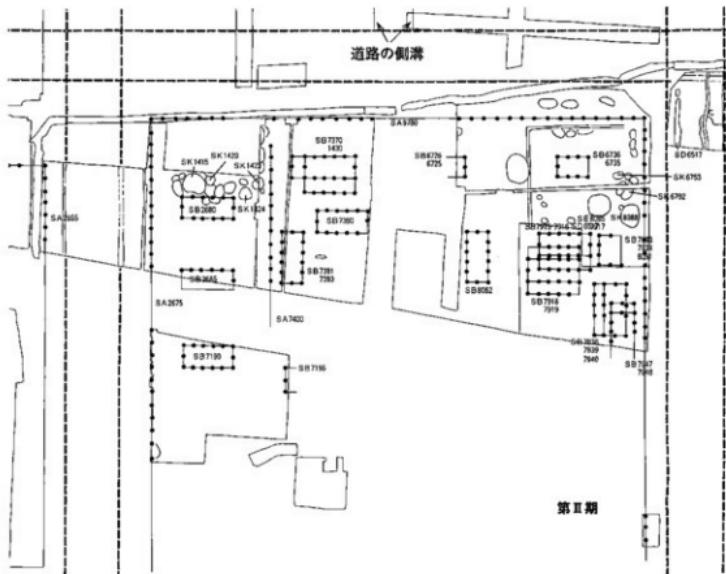


第I~Ⅴ期



第Ⅰ期

第18図 銀治山西区画造構変遷図(1)



第19図 錬冶山西区画遺構変遷図（2）

2棟はほぼ大区画の中央に位置していたと見る事ができる。

また、西接する牛葉東区画の近年の発掘調査による知見でも大型の柵列施設が成立し、内院的な機能を充実させるのが、鍛治山西区画にやや遅れて平安時代初期頃からと推定されているが、これにより牛葉東区画との機能の分担あるいは振替が行われ、鍛治山西区画の第Ⅱ期の変革となって現れていると考えるのが自然であろう。この第Ⅱ期の変革を延暦四年（785）に造営官長官に任じられた従五位上紀朝臣作良による斎宮の造営・整備によるものとみると、第Ⅰ期は宝亀二年（775）の造営使鍛治正徳五位下氣太王の造営による光仁朝の段階に相当するとみられ、この間任在する酒内親王・淨庭内親王の二人の斎王に第Ⅰ期の中の画期を当てる事が可能である。

土器溜まり の変遷

これまでの内院地区の区画の変遷は主要な掘立柱建物の変遷で語られる事が多かった。今回はこれに加えて、内院地区でも特徴的な遺構である「土器溜まり」の鍛治山西区画での変遷もみてみたい。なお「土器溜まり」については、土器師供膳具を中心とした構成を持ち、炭化材や焼土塊などを共伴する事がある基本的には使用された状態での土器の大量投棄土坑を指すものとする。

第Ⅰ期

第Ⅰ期にあたる奈良時代後期の土器溜まりは現在発見されていない。

第Ⅱ期

第Ⅱ期のうち平安時代初期のものについては極めて小規模なもの以外ほとんど見つかっていない。前Ⅰ期になると区画北西部のSK1415・1423・1424・7420や、多くは区画北東部のSK6753・6792・8084・8088などがある。また区画北辺中央部には規模は大きくないがSK6743がある。

第Ⅲ期

平安時代前Ⅱ期のものは、区画北西部のSK2650・7430など大規模なものが出現する。SK6771・6772などの極めて小規模なものは区画北東部にも散見される。平安時代前・期末頃から中期になると、区画中央部よりのSK1459・8071・8073bなどの土抗やSD1460・6750・8069・8066などの区画溝の最終埋没過程に伴う投棄が目立つ。

牛葉東区画 との比較

以上のように主要なものでみていくと鍛治山西区画内でも土器溜まりが特に作られる場所は時期により移動しており、これまでみてきた遺構の画期ともある程度整合している事が窺える。今後各建物群の性格を検討する上で重要な材料となるだろう。

遺構の章でも述べたが、鍛治山西区画の画期は牛葉東区画の画期と密接に連動したものである事が今回の調査でより一層明確になった。第Ⅱ期への変遷とともに牛葉東区画での柵列の囲みが成立し、第Ⅲ期の成立の頃には少なくとも牛葉東区画の柵列は消滅していたと考えられる。また、第Ⅲ期の成立とともに鍛治山西区画で成立したとみられる2本平行する区画溝（土壙？）が中期末には埋没するのを受けて、牛葉東区画で後Ⅰ期に成立した事が窺える。しかしながら牛葉東区画の大部分が未調査の現段階ではこの2区画の機能上の変化を論じる事はできない。30年の厚みを持つ斎宮跡の発掘調査の歴史の積み重ねにより平安時代の斎宮中枢部、内院の構造に大きく迫りつつあるが、それにより我々に与えられた課題もまた大きいと言える。

（大川 勝宏）

〔註〕 平成7年度概報までこの部分に想定されていたSB6730は柱穴の遺物や建て替えの連續性を再検討した結果、平安時代初期以降のものとして判断することとした。

III 第 126 次 調 査 (6 A G U 中西東地区)

1はじめに

経過

第126次調査は、昭和60年度にトレンチ調査を行った第58-7次調査の南側約35mの地点で実施した。調査面積は200m²で、現況は休耕田の畠地である。

目的

方格地割の南端の状況は、これまでの調査では南西隅の木葉山区画で八脚門が確認され、これにとりつく柵列が明らかになっているが、その他の区画では状況がはっきりとしていない。また、今回の調査地点の周辺での面的な調査は約120m東へ離れた地点で第104次調査が実施されているのみである。このような状況であるため、今回の調査は方格地割南端の遺構の状況把握を目的として実施した。調査は平成10年10月19日から開始し、11月24日に埋め戻しが終了した。

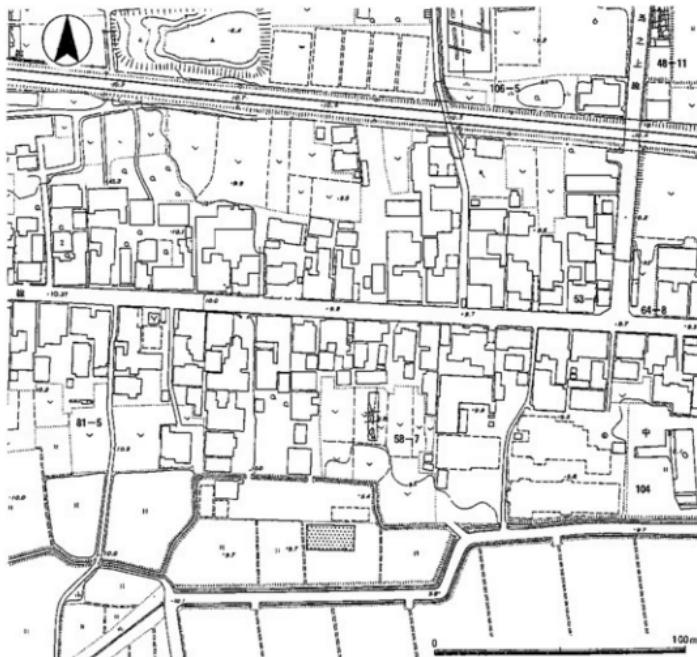
現況

現況の表土から遺構面までの深さは、西側で約0.3m、東側で約0.4mである。遺構面は黄色土で捉えた。遺構検出面の標高は9.3m前後である。遺構検出面までの基本的層位は、第1層褐色灰色土（耕作土）、第2層褐色灰色土（遺物包含層）である。

2 遺構

(1) 室町時代の遺構

この時期の遺構には、溝1条がある。



第20図 第126次調査 調査区位置図 (1 : 2,000)

SD8098 調査区の東端にある溝である。北側では擾乱土抗と重複しているが溝の底部は残っている。溝の幅は検出面で2.8m、底で0.4m、検出面からの深さは0.4m前後である。溝の振りはN16°Wである。黒褐色土の埋土からは土師器皿・鍋、施釉陶器皿が出土しており、室町時代のものである。

(2) 時期不明の遺構

室町時代より新しく時期不明の遺構には、土坑1基、溝3条がある。

SK8095 調査区北西隅で検出した。調査区外へ続くため、その規模・性格は不明である。検出面からの深さは0.3mである。黒褐色土の埋土からの出土遺物はなく遺構の時期は不明である。

SD8096・8097 SD8096は南西の隅で東西方向の溝と南北方向の溝が合流し、東へと続くが調査区の中央付近で北東方向に向きを変える。溝の幅は1.6m～1.9mであるが、徐々に溝幅も狭くなり途切れてしまう。SD8097はSD8096とはほぼ直交する南北方向の溝であるが、重複の関係からSD8096より新しい。ともに遺構検出面からの深さは0.15m前後で非常に浅い。SD8097からは土師器皿・鍋が出土しているが細片のため、室町時代以降であろうが時期は判断しがたい。SD8097は北東隅で検出した溝で、検出面での溝の幅は0.5m前後、深さは検出面から0.2mと浅い。出土遺物はなく、時期は不明である。

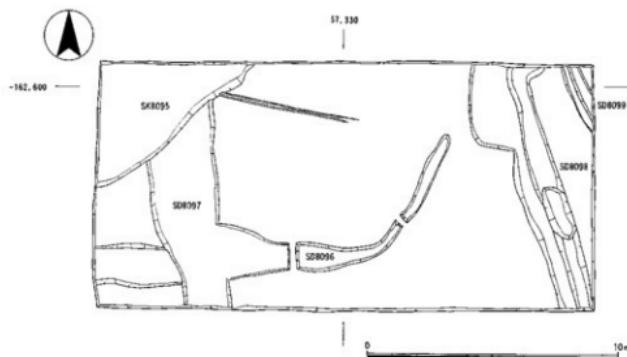
3 遺 物

今回の調査では鎌倉時代から室町時代にかけての土器が出土しているが、遺物整理箱で3箱分と少ない。土師器皿・鍋、山茶碗、施釉陶器などがあるが、細片ばかりである。なお、遺物包含層から綠釉陶器と青磁碗が各1点出土している。

4 まとめ

今回の調査では、方格地割南端の東西道路あるいはその側溝、また、それにとりつくような遺構の検出を想定したが、検出されなかった。東西道路の南側溝はもう少し北に位置するのであろう。今後の周辺地域での発掘調査の進展とともに資料の蓄積をはかり、方格地割南端の状況を解明していく必要があろう。

(上村安生)



第21図 第126次調査 遺構実測図 (1 : 200)

第3表 第124次調査掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規 模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法		時 期	備 考
					桁行	梁行		
S A2705	20	E 4°N	60.0	—	3.0	—	奈良後期	第44・109次調査の延長
S A8080	(4)	N 4°W	(12.0)	—	3.0	—		
S B6740	3×3	N 4°W	6.3	5.4	2.1	1.8		総柱建物
S B7385	5×2	E 4°N	15.0	6.0	3.0	3.0		
S B8050	5×2	E 4°N	15.0	6.0	3.0	3.0		
S B8090	3×3	N 4°W	6.3	5.4	2.1	1.8		総柱建物
S A6770	(6)	N 4°W	(18.0)	—	3.0	—	平安初期	第98・119次調査の延長
S B8060	5×2	N 4°W	12.0	4.8	2.4	2.4		
S B8061	5×2	N 4°W	12.0	4.8	2.4	2.4		
S B8091	3×2	N 4°W	7.2	4.8	2.4	2.4		
S B7915	5×3	E 4°N	12.0	8.1	2.4	2.7	平安前I期	南底出2.4m、S B7919より新
S B7916	5×3	E 4°N	12.0	8.4	2.4	2.7		南底出3.0m、S B7915より新
S B7917	5×3	E 4°N	12.0	8.1	2.4	2.7		南底出2.7m、S B7916より新
S B8062	5×2	N 4°W	12.0	4.8	2.4	2.4		

報告書 区分	出土 遺物	器 種	計測値 (cm)	調査・技法的特徴	地 質	構成 物	色	調	保存度	備 考
497	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.5 6.2 1.4	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR7/4		4/5	R210
498	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.8 5.4 1.7	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：浅黄模7.5YR8/4		1/2	R173
499	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	10.9 5.1 1.9	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：模7.5YR7/6		9/10	R180
500	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.4 5.7 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：模5YR7/6			R127
501	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.5 6.3 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い黃模10YR7/2		9/10	R126
502	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.6 6.5 1.5	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：模7.5YR7/6		4/5	R135
503	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	12.1 5.8 1.4	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR8/4			R133
504	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.6 6.6 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い黃模10YR7/3		4/5	二次焼成？
505	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.3 6.4 2.6	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：模7.5YR6/6		1/2	R200 高台100
506	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.4 5.8 2.3	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：浅黃模10YR8/4		7/10	R192
507	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.4 5.6 2.2	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR7/4			R181
508	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.0 6.6 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：明黃模10YR7/6		9/10	R164
509	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.4 6.0 2.8	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：模7.5YR7/6			R162
510	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.8 6.4 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い黃模10YR7/3		7/10	R212
511	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.1 5.8 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR7/4		3/5	R145
512	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.7 6.7 2.2	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：明黃模10YR7/6		3/5	R146
513	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.7 6.5 2.2	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：灰白模10YR8/2		4/5	R211
514	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.2 5.8 2.2	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：浅黃模10YR7/4		4/5	R187
515	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.2 6.4 2.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR7/4		3/5	R138
516	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	12.7 6.0 2.4	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い黃模10YR7/3		1/2	R153 完形
517	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	11.9 7.0 3.0	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR7/4		9/10	R161
518	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	12.4 7.2 2.6	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。高台脚付ナデ	畫 良	内外：浅黃模10YR8/4		7/10	R116
519	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	13.4 7.5 2.7	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：模7.5YR7/6		1/2	R159 高台100
520	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	14.3 8.7 3.5	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：浅模2.5YR8/4			R154
521	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	15.0 8.8 3.6	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い模7.5YR7/4		1/2	R130 高台80
522	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	12.3 7.4 3.6	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：に赤い黃模10YR7/3		7/10	R165
523	S K6750	土師器 台付皿	口径 高台径 脚高	15.7 9.1 4.2	口：ヨコナデ、外：ナデ・オサエ、 内：ナデ・オサエ。脚：ヨコナデ	畫 良	内外：灰黄模10YR6/2		3/5	内：布目伝

標識番号	出所	種類	計測方法	抽出	測定	色	調	現存度	備考	登録番号
S73 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.4 2.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR6/3	3/5		R56	
S74 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.3 2.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/6	4/5		R42	
S75 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.2 2.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	外: にぶい 黄褐色10YR7/4	死形	底外: 煙付着	R19	
S76 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.4 2.7	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/2	9/10		R53	
S77 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.4 2.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	3/5		R36	
S78 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.0 2.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	3/5		R39	
S79 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.6 2.4	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/6	2/5		R66	
S80 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.2 2.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/3	死形	内: 黒色物付着	R38	
S81 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.6 2.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/3	はぼ 死形		R93	
S82 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.6 2.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	死形	二次焼成 ^外 内: 混合付着	R75	
S83 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.4 2.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/3	死形	内: 黑色物付着	R72	
S84 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	11.5 2.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/3	はぼ 死形		R92	
S85 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.7 2.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	外: 混合2.5YR5/2	1/2		R5	
S86 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.3 2.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	死形	内: 黑色物付着	R74	
S87 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.0 3.1	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	内: にぶい 黄褐色10YR6/4	死形	内: 黑色物付着	R15	
S88 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.0 3.0	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/4	9/10		R100	
S89 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.4 2.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	外: 混合2.5YR8/2	死形		R18	
S90 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.4 2.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/3	はぼ 死形		R102	
S91 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.6 2.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR8/4	9/10		R73	
S92 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.8 2.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/4	死形		R46	
S93 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	12.8 3.0	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	内: 混合2.5YR8/2	はぼ 死形		R1	
S94 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	13.6 2.9	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/3	7/10		R57	
S95 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	13.6 3.2	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR8/4	7/10	二次焼成	R40	
S96 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	14.0 3.0	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/3	4/5		R76	
S97 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	15.6 3.7	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	はぼ 死形		R11	
S98 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	14.0 3.7	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/2	1/5	外: 枯れ	R840	
S99 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	16.8 4.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR8/4	死形		R33	
S100 SD1460	土師器 鉢	口径 底高	11.0 1.6	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/3	死形		R32	
S101 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.5 1.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/3	9/10	高台剥離	R85	
S102 SD1460	土師器 皿	口径 底高	10.2 1.0	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/6	4/5		R62	
S103 SD1460	土師器 皿	口径 底高	11.3 1.3	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	やや良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	9/10		R4	
S104 SD1460	土師器 皿	口径 底高	11.4 1.2	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	死形		R17	
S105 SD1460	土師器 皿	口径 底高	11.5 0.9	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/4	3/5		R96	
S106 SD1460	土師器 皿	口径 底高	11.2 1.1	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	死形		R95	
S107 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.0 1.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ,	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR8/4	死形		R91	
S108 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.5 1.5	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色10YR8/3	9/10		R88	
S109 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	10.0 5.4	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・高台付着ナヂ	やや良	内: にぶい 黄褐色10YR6/3	3/5	内: 黑色物付着	R10	
S110 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	10.3 5.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/6	4/5	高台: 黑色物付着	R61	
S111 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.5 5.4	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/6	7/10		R84	
S112 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.4 5.8	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/6	7/10		R60	
S113 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.0 5.9	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/6	死形	内: 黑色物付着	R47	
S114 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	11.1 6.3	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色7.5YR7/3	9/10		R99	
S115 SD1460	土師器 付合皿	口径 底高	12.0 2.0	□:ヨコナダ, 外: ナヂ・オサエ, 内: ナヂ・オサエ, 部: ヨコナダ	良	内: にぶい 黄褐色10YR7/4	4/5		R44	

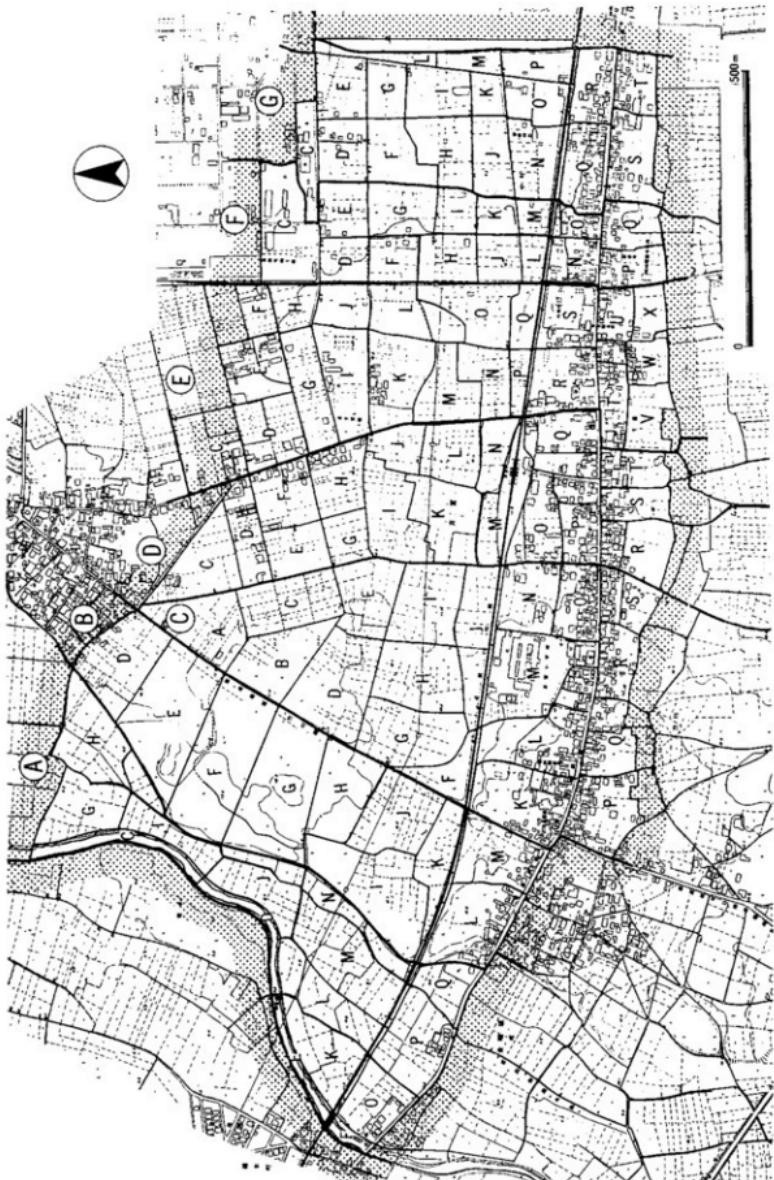
樹木番号	出土遺物	器種	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	出土 構成	色 調	残存度	備考	登録番号
616	SD1460	土師器 台付皿	口径 10.6 高台径 5.5 盤高 2.1	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：橙7.5YR7/6		7/10		R43
617	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.0 高台径 6.7 盤高 2.0	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	直 良 内外：にぶい黄橙10YR6/3		7/10		R108
618	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.4 高台径 6.7 盤高 1.5	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：橙7.5YR7/6		9/10		R80
619	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.1 高台径 6.0 盤高 2.0	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：にぶい橙7.5YR7/4		4/5		R55
620	SD1460	土師器 台付皿	口径 13.0 高台径 7.5 盤高 2.0	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：橙7.5YR6/6		注記 完形	外：接合痕	R71
621	SD1460	灰陶器 台付皿	口径 12.8 高台径 6.7 盤高 1.8	内：ヨコナダ、外：斜面系切り目、外：回転系切り目、脚：斜面	直 良 内外：灰白5Y7/1		2/5		R106
622	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.3 高台径 5.8 盤高 2.4	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	やや直 良 内外：にぶい黄橙10YR7/4		完形	外：接合痕	R18
623	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.6 高台径 6.2 盤高 2.5	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：にぶい橙7.5YR7/4				R69
624	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.0 高台径 6.6 盤高 2.6	口：ヨコナダ、体外：タテハケ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	直 良 内外：淡黄橙10YR8/4		2/5	タテハケ：8本/1.1cm	R50
625	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.4 高台径 6.7 盤高 2.7	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	直 良 内外：橙7.5YR7/6		7/10		R105
626	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.8 高台径 5.1 盤高 2.5	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：浅黄橙10YR8/6		9/10		R67
627	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.1 高台径 6.6 盤高 2.6	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	やや直 良 内外：にぶい黄橙10YR7/3			内：埋付部 近内：合板痕	R20
628	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.9 高台径 5.5 盤高 2.6	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	やや直 良 内外：にぶい黄橙10YR7/4		7/10		R6
629	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.2 高台径 6.6 盤高 2.5	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：にぶい黄橙10YR6/4		3/5		R51
630	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.1 高台径 6.8 盤高 2.7	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	やや直 良 内外：にぶい橙7.5YR7/4		3/4		R22
631	SD1460	土師器 台付皿	口径 11.7 高台径 5.0 盤高 2.6	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	直 良 内外：浅黄橙7.5YR8/3			注記 完形	R34
632	SD1460	土師器 台付皿	口径 12.3 高台径 5.9 盤高 3.0	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	やや直 良 内外：橙7.5YR7/6		1/2		R14
633	SD1460	土師器 台付皿	口径 17.0 高台径 10.4 盤高 3.5	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：にぶい橙7.5YR7/4		3/10	内：煤付部	R97
634	SD1460	土師器 台付皿	口径 15.0 高台径 8.6 盤高 4.9	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・高台付ナデ	直 良 内外：橙7.5YR7/6		1/2		R103
635	SD1460	土師器 台付皿	口径 15.0 高台径 8.6 盤高 4.9	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：にぶい橙7.5YR7/4		2/5		R101
636	SD1460	土師器 台付皿	口径 10.0 高台径 5.7 盤高 4.0	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ・オサエ、脚：ヨコナダ	直 良 内外：浅黄橙7.5YR8/3		7/10	口：黑色物付着	R49
637	SD1460	土師器 壺	口径 8.0	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ・ハケメ、内：ナデ	直 良 内外：浅黄橙10YR8/3		□50	ハケ：9~10本/cm	R23
638	SD1460	土師器 壺	口径 11.0	口：ヨコナダ、外：ハケメ、内：ナデ	直 良 内外：浅黄橙10YR7/6		5/10	外：はぼぼ全面に拂	R109
639	SD1460	土師器 壺	口径 14.8	口：ヨコナダ、外：ナデ・オサエ、内：ナデ	直 良 内外：浅黄橙10YR8/3		□25		R24
640	SD1460	土師器 壺	口径 26.0	口：ヨコナダ、体外：タテハケ、内：ナデ	直 良 内外：浅黄橙7.5YR8/6内：にぶい橙7.5YR5/3		□20		R110
641	SD1460	須恵器 壺	口径 1—	口：ヨコナダ、内：ヨコナダ	直 良 内外：灰10YR6/1		□10	三脚口輪	R59
642	SD1460	灰陶器 壺	口径 10.8 高台付 壺	内：ヨコナダ、高台付ナデ、底外：朱切り痕、地：つけ脚1	直 良 内外：灰10YR6/1 内：灰10YR6/1、灰2.5YR4/1		1/2	高台：土器付着	R3
643	SD1460	灰陶器 壺	口径 12.0 高台付 壺	内：ヨコナダ、底外：朱切り痕、内：灰胎	直 良 内外：灰2.5YR2/2、灰2.5YR7/3 内：灰白5Y/1、灰2.5Y/1		3/5	底内：擦耗、墨痕	R814
644	SD1460	縄陶器 壺	口径 10.4	内：ヨコナダ、底外：ヨコナダ、外：朱胎	直 良 内外：にぶい黄橙10YR6/3 外：朱胎5-8cm×8cm-3.5cm		□30		R813
645	SD1460	縄陶器 壺	口径 11.1	内：ヨコナダ	直 良 内外：灰10YR5/1 外：灰胎5-8cm		□25	輪輪推定4ヶ所	R812

第5表 斎宮跡発掘調査次数一覧表

次 数	年 度	調 査 地 区	次 数	年 度	調 査 地 区
1	S 45	試掘	13-8	51	西加座2771-1 (縹井)
2	46	古里A地区	13-9	"	2773 (縹井)
3		" B地区	13-10		東裏362-1 (児島)
4	47	" C地区	13-11		西加座2681-1 (浮田)
5	48	" D地区	13-12		" 2721-3, 2724-2 (森川)
6-1		Aトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-2		Bトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-3		Cトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
6-4		Dトレンチ	14-3		2 Gトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
7	49	古里E地区	14-5		2 Iトレンチ
8-1		Fトレンチ	15		斎宮小学校
8-2		Gトレンチ	16-1		竹川町道A
8-3		Hトレンチ	16-2		" B
8-4		Iトレンチ	16-3		" C
8-5		Jトレンチ	16-4		" D
8-6		Kトレンチ	16-5		" E
8-7		Lトレンチ	16-6		" F
8-8		Mトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-9		Nトレンチ	17-2		竹神社防火用水
8-10		Oトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
8-11		Pトレン	17-4		楽 瞳2894-1 (中川)
9-1	50	Qトレンチ	17-5		" 2895-1 (西口)
9-2		Rトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-3		Sトレンチ	17-7		" 3237-1 (里中)
9-4		Tトレンチ	17-8		楽 瞳2894-1 (西村)
9-5		Uトレンチ	17-9		東海造機
9-6		Vトレンチ	18	53	6AEL-E・I (下園)
9-7		Wトレンチ	19		6AEN-M (御館)
9-8		Xトレンチ	20		6AEO-I・J (柳原)
9-9		Yトレンチ	21-1		6AGN-B (巣治山、北山)
9-10		Zトレンチ	21-2		6AEI-D (西加座2711-2ほか、山路)
10		広域匱道路	21-3		6AFD-D (西前沖2649-1、大西)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-4		6AFH-F (西加座2678、2679-3、森下)
11-2		" 2681-1 (山名)	21-5		6AGD-K (東前沖、渡辺)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-6		6ACA-T (古里3269-2、中西)
11-4		下 園2926-9 (吉木)	21-7		6AFE-F (東前沖2631-1、鈴木)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-8		6AEG-A (楽 瞳2909-3、大西)
12-2		2 Bトレンチ	21-9		6AED-R (篠林3218-3、宇田)
12-3		2 Cトレンチ	22-1		6AGU
12-4		2 Dトレンチ	22-2		6AGU
13-1		東加座2436-7 (浜口)	22-3		6AGW
13-2		" 2436-4 (中村)	23	54	6AEL-B (下園)
13-3		古 里3283 (村上)	24		6AGF-D (西加座)
13-4		樂 殿2916-2917 (松井)	25-1		6ADP-K (牛葉3029-1、三重土地ホーム)
13-5		御 館2974-1 (川本)	25-2		6ACA-Y (古里3270、藤田)
13-6		中垣内375-1 (南)	25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)
13-7		東 裏328 (小川)	25-4		6AER-H (牛葉3014、牛葉公民館)

次 数	年 度	調 査 地 区	次 数	年 度	調 査 地 区
25- 5	54	6AGN-H (鍛冶山2392、丸山)	42- 2	57	6AEK-A・B (楽殿)
25- 6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	43- 1		6ADC-C (出在家3235-2、水田)
25- 7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	43- 2		6ADT-B (木葉山308-1、山本)
25- 8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	43- 3		6ACP-T (南裏241-1、辻)
25- 9		6ACN-C (広頭3387-1、北出)	43- 4	57	6ADS-D (牛葉123-3、西山)
25-10		6AEV-A (鈴池339-1、永島)	43- 5		6ADE-D (篠林3220-3、澄野)
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43- 6		6AGE (東前沖、町道側溝)
25-12		6AEE-Y (楽殿2892-3、山本)	43- 7		6ABD-F (古里588-6、今西)
25-13		6AEJ-E (西加座2766-1、山内)	43- 8		6ADQ-H (牛葉3025-2、大西)
26- 1		6AFR (中西)	44		6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)
26- 2		6AEX~6ACQ (鈴池、木葉山、南裏)	45		6AEG-P・Q (楽殿2904-2、他)
26- 3		6AEV・W・X (鈴池)	46		6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)
26- 4		6ACR (木葉山、南裏)	47		6ADJ-D・G (西加座、御館、宮ノ前他)
27		6AGC-S・T (東裏)	48- 1	58	6AGM-M (広頭3385、斎宮小)
28		6AEQ-D (柳原)	48- 2		6ADP-Q (牛葉3033-1・2、吉田)
29		6AFI, 6AFL, 6AFK, 6AFM, 6AGJ	48- 3		6ABL-M (中垣内434-6、西川)
30	55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	48- 4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31- 1		6ADO-M (内山3038-13、岩見)	48- 5		6AGD~6AFE (東前沖、町道側溝)
31- 2		6ACP-I (南裏227-2、鈴木)	48- 6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31- 3		6ABD-A (古里588-4、北戴)	48- 7		6ADT-H (木葉山307、森西)
31- 4		6ADQ-T (牛葉3018-2、百五銀行)	48- 8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
31- 5		6ACC-G (塚山3338-3、水谷)	48- 9		6AEV-J (鈴池341-1、乾)
31- 6		6ABO-X (古里576-1、池田)	48-10		6AGT (牛葉、町道側溝)
31- 7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-11		6ADP-E (鍛冶山2351-1・2352-1、柳原)
31- 8		6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
31- 9		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-13		6ACM-O (東裏、斎宮小)
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)	48-14		6AET (牛葉、町道側溝)
31-11		6ADT-I (木葉山304-2、澁野)	49		6ADL-D・U・V・W・X (上園3083、他)
31-12		6ADT-J (木葉山304-7、宇田)	50		6ACH-H (東裏294, 297、山本)
32		6ACE-D・E・F (塚山)	51		6AFF-D (西加座2663-1・4, 2664、森下)
33		6ADE-C・D (篠林)	52		6AGF-D (西加座2703、他)
34		6ADE-F・G・H (西加座)	53- 1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)
35		6APE他 (西前沖)	53- 2		6ACA-M (古里3280-2、中西)
36	56	6ABL-F (中垣内)	53- 3		6ABE (古里573-2、永納)
37- 1		6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	53- 4		6ACL-S (東裏271-1、田所)
37- 2		6ADQ-R (牛葉3021-2、野田)	53- 5		6ACR (木葉山97-5、田中)
37- 3		6AFC-F (西前沖2604-6、神田)	53- 6		6AGO (鍛冶山、町道側溝)
37- 4		6AFC-M (西前沖2604、日本経木)	53- 7		6ADD-U (篠林3147-3、野呂)
37- 5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53- 8		6AGE-O (東前沖2470-2、上田)
37- 6		6ABD-A (古里588-2、北戴)	53- 9		6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)
37- 7		6AEC-M (苅2861-2、斎王公民館)	53-10		6ACA-R (古里3267-1、西川)
37- 8		6ADR-P (木葉山128-8・13・14、富山)	53-11		6ADR-W (木葉山131-7、西村)
37- 9		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-12		6ABL-K (中垣内464-2、沢)
37-10		6AED-O (楽殿3217-1、渡部)	53-13		6ADQ-L (牛葉3022、辻)
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)	53-14		6ACM-O (東裏287-3、体育館)
37-12		6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)	53-15		6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)
37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)	54		6AFE-N (西前沖2630、他)
38		6ACD-S (塚山)	55		6AEN-P (柳原、御館2785-1、他)
39		6ABD-R・S・T (古里)	56		6ACH-S (東裏289-1、他)
40		6AGH-L・M (東加座)	57		6AGF-H・I (東加座2441、他)
41		6AGJ-J他 (斎宮地内)	58- 1	60	6AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)
42- 1	57	6AEI-D・F (楽殿)	58- 2		6AFH-N (西加座2681-1、三村)

次 敷	年度	調査地区	次 数	年度	調査地区
85-6	2	6AFH-B (西加座、明和町) 6ACB-C (塙山3276-3他、加藤)	113-1	8	6ACI (広頑地内) 6ACI (広頑地内)
85-7		6ABI-N (中垣内427-1、小林)	113-2		6AEQ-E・F (柳原地内)
85-8		6AFH-F・G・H (西加座2679-1、他)	114		6ADK・DL (上園・宮ノ前地内)
86		6ACE-N (塙山3356、他)	115-1		6ADK (上園地内)
87		6AGN-C・D (鍛治山2411-1、他)	115-2		6ADG (篠林地内、他)
88			116-1		
89-1	3	6ADM-O (内山3043-5、近鉄斎宮駅) 6AGI-M (東加座2432-2他、北村)	116-2		6ADM-A (内山)
89-2		6ADM-N・O (内山3060-4、近鉄斎宮駅)	116-3		6ADI-Q (宮ノ前地内)
89-3		6AFH-A・B (西加座2680、他)	116-4		6ADI-M・N (上園地内)
90		6ABH-F (中垣内393、他)	116-5		6ADI (上園・篠林地内)
91		6AGN-A (鍛治山2734-3)	116-6		6ADH (篠林地内)
92		6ADN (内山3045-12、他)	117-1		6AEF (楽殿2984-4)
93		6AEM (御館2942)	117-2		6ADF-A・B (篠林3155-1、他)
94			117-3		6ABJ (中垣内地内)
95	4	6ADN (内山3046-17、他)	117-4		6ADP (牛葉地内)
96-1		6AGM (東加座2374、丸山)	117-5		6AFC-M (北野3553-1、他)
96-2		6ADO (内山3068-3他、明和町)	117-6		6ACM-B (東裏266-6)
96-3		6ACA-D (古里3260、清水)		9	6ADN (内山地内)
96-4		6AFN (中西2749-1、本山)	118		6AFM-E・G (鍛治山西地内)
96-5		6ADR-T (木葉山28-3、加藤)	119		6AFI-C・E・6AFG-R (西加座地内)
96-6		6ADD-D (篠林3138-1、藤井)	120		6AJB他 (宮ノ前地区、他)
97		6AEM (中垣内482、他)	121		6AFN (鍛治山地内)
98		6AFM-C・E (鍛治山2475、他)	122		6AFQA-A (中西地内)
99	5	6ADN (内山3046-11、他)	123-1		6AFN他 (中西・笹川地内)
100		6ABI-T (中垣内423)	123-2		6ADP-F~H・L (牛葉地内)
101		6ADG (篠林3194)	123-3		6ADQ-A~C (牛葉地内)
102-1		6ADS (木葉山119-5、澄野)	123-4		6AEE (刈干地内)
102-2		6AED-J (楽殿2882-5、杉本)	123-5		6ACC-I (琴山地内)
102-3		6AAQ花園663-1、中川)	123-6		
102-4		6ACF-A (東裏365-1、樋口)	124	10	6AFM-B・E・G (鍛治山地内)
102-5		6ABJ-D (中垣内493-6、川口)	125-1		6ACC-I (塙山3337-1他)
102-6		6AG (鍛治山地内、明和町)	125-2		6AES他 (斎宮・竹川地内)
102-7		6ACG-E (東裏318-1、川本)	125-3		6ADD-R (篠林地内)
102-8		6AE (楽殿地内、明和町)	125-4		6ACN (広頑)
103		6AEQ-A (柳原2779-3)	126		6AGU (中西)
104		6AGT (笛川1048-1、他)			
105	6	6AFN (鍛治山2758-1、他)			
106-1		6AEW-J (跡池338-1、森西)			
106-2		6AEW-W (楽殿2891-3、向井)			
106-3		6AFL他 (鍛治山地内、明和町)			
106-4		6AEC-L (辺2861、坂本)			
106-5		6AGO (鍛治山2362、青山)			
106-6		6ACC-B (塙山3340-4、田畑)			
107		6ABI-O (中垣内414-1、他)			
108		6AEQ-C (柳原2779-2、他)			
109	7	6AFL-D (鍛治山2763-1、他)			
110-1		6ACM-J (東裏262-3、斎宮土地改良区)			
110-2		6AGR-O (笛川2345-3、竹内)			
111-1		6ADM (内山地内)			
111-2		6ADK (上園地内)			
111-3		6ADL他 (宮ノ前地内)			
112		6ACB-B (塙山3276-15、他)			



第22図 萩宮跡地区表示



第23図 茅宮跡方格地割区画名称

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせい 10ねん どはくつちょうさがいほう						
書名	史跡斎宮跡 平成10年度発掘調査概報						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	駒田利治・上村安生・大川・勝宏・角正芳浩						
編集機関	斎宮歴史博物館						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-3800						
発行年月日	2000年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
斎宮跡 第124次 調査	多気郡明和町斎宮他 斎宮宇賀治山	2442	210	34°31'55"	136°36'16"	19980706 ~981112	978	計画調査
	斎宮宇中西			~ 34°32'30"	~ 136°37'37"			
第126次 調査						19981019 ~981124	200	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡 第124次 調査	宮殿	奈良後期 ~平安中期	掘立柱建物・櫛 土坑・溝	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器	平安時代初期の内院の内郭構列
第126次 調査	室町	室町	溝・土坑	土師器、灰釉陶器	

図 版



調査区全景（上から）



調査区全景（北から）



S A 2705 (西から)



S B 7385・S B 8050 (北から)



S B 8050 (東から)



S A 6790・S D 6803 (北から)



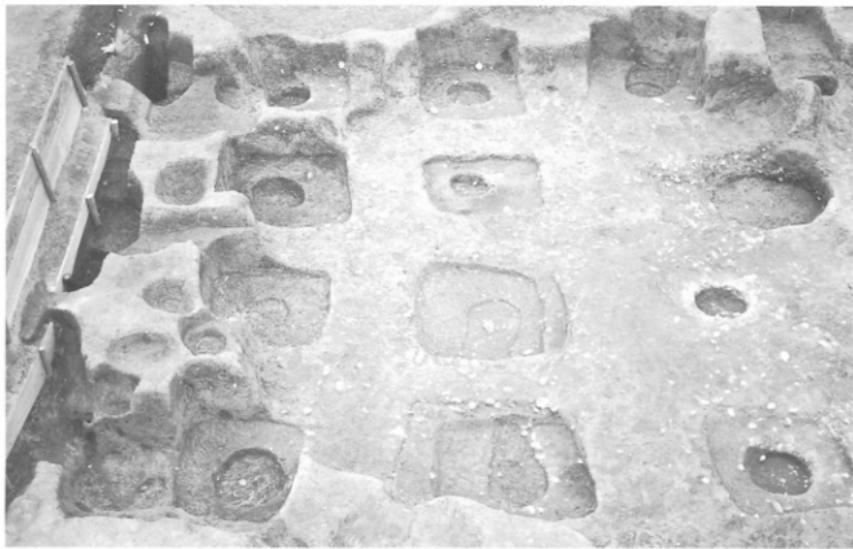
S B 8060・8061・8062（北から）



S B 8091（南から）



SB 7915・7916・7917 (北東から)



SB 8090 (東から)



S B6740 (東から)



S E8085 (東から)



S K 6792遺物出土状況（北から）



S K 6794南焼土面断ち割り状況（西から）



SK 8088 遺物出土状況（東から）



SK 8088 埋土断面（南から）



SD 1460 遺物出土状況（南から）



SD 8066 遺物出土状況（北から）



SD 8063・SD 8064（東から）



SD 8069・SK 8071（東から）



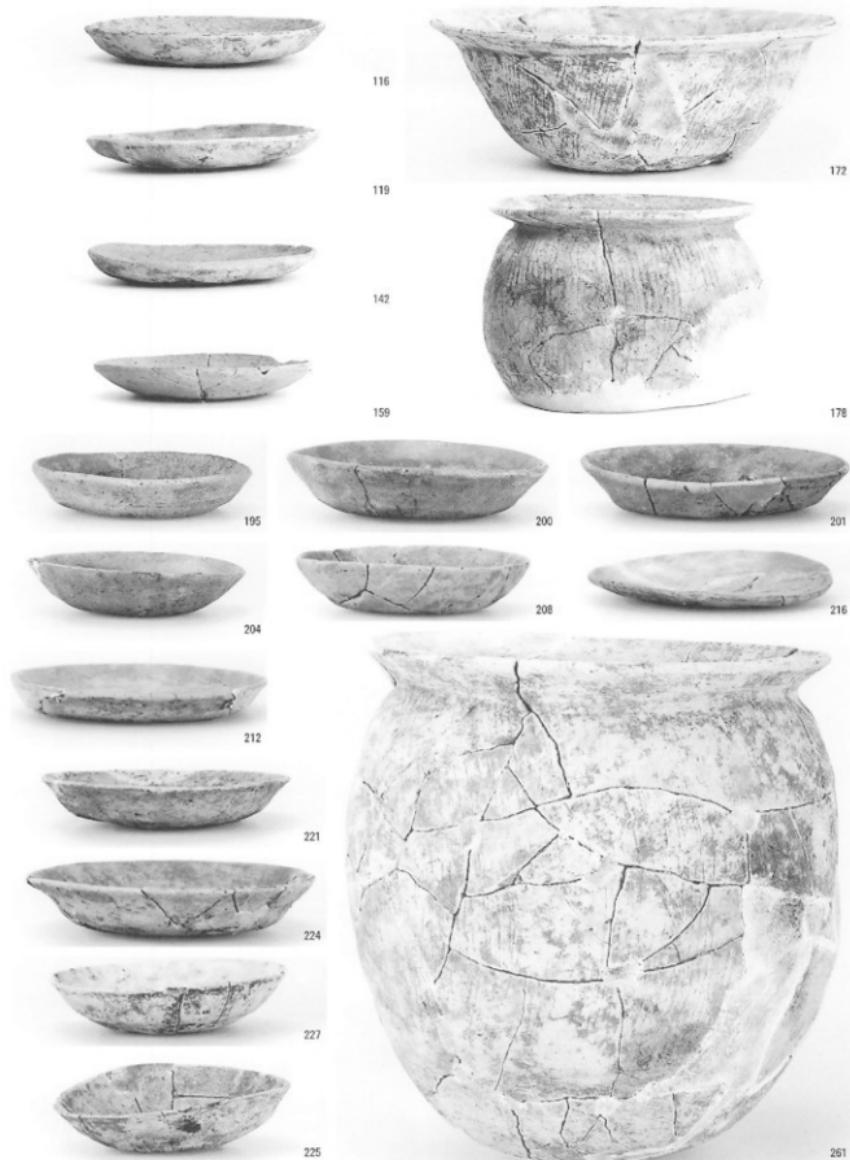
調査区全景（西から）



S D 8098・8099（南から）



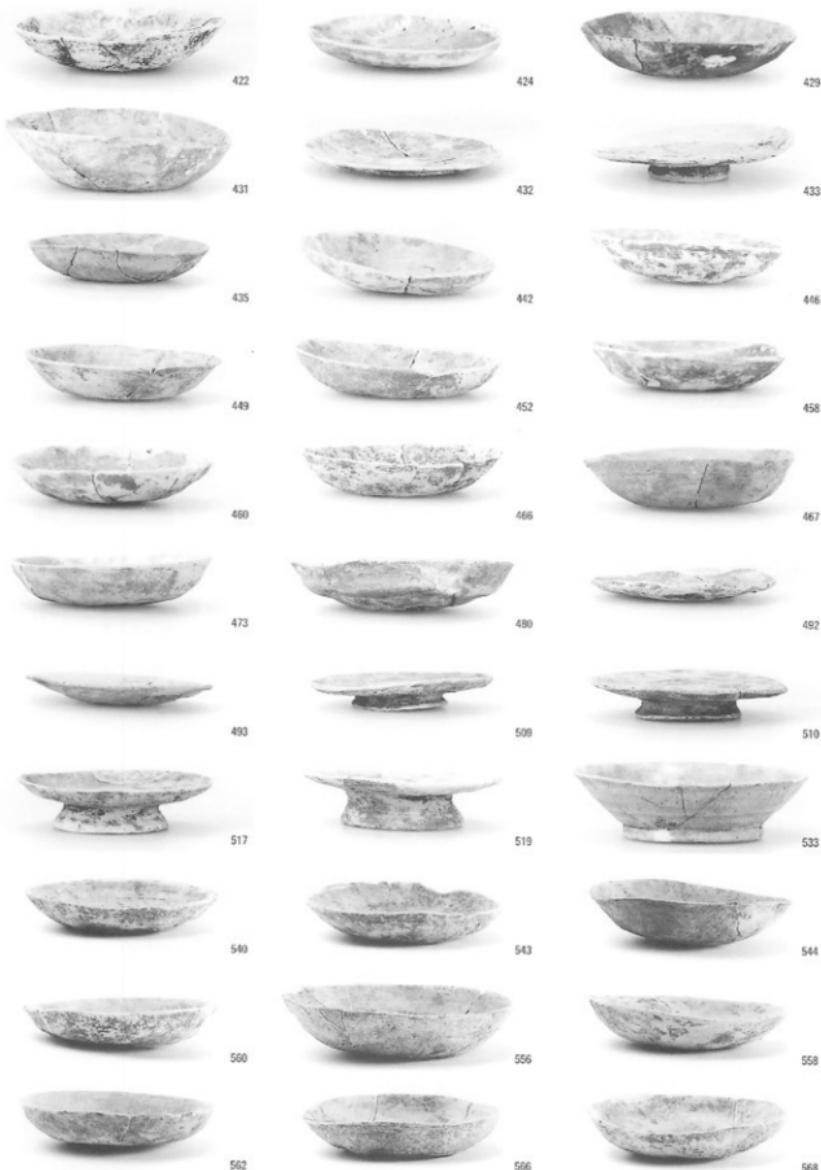
遺物写真 (SK8057 SK8088)



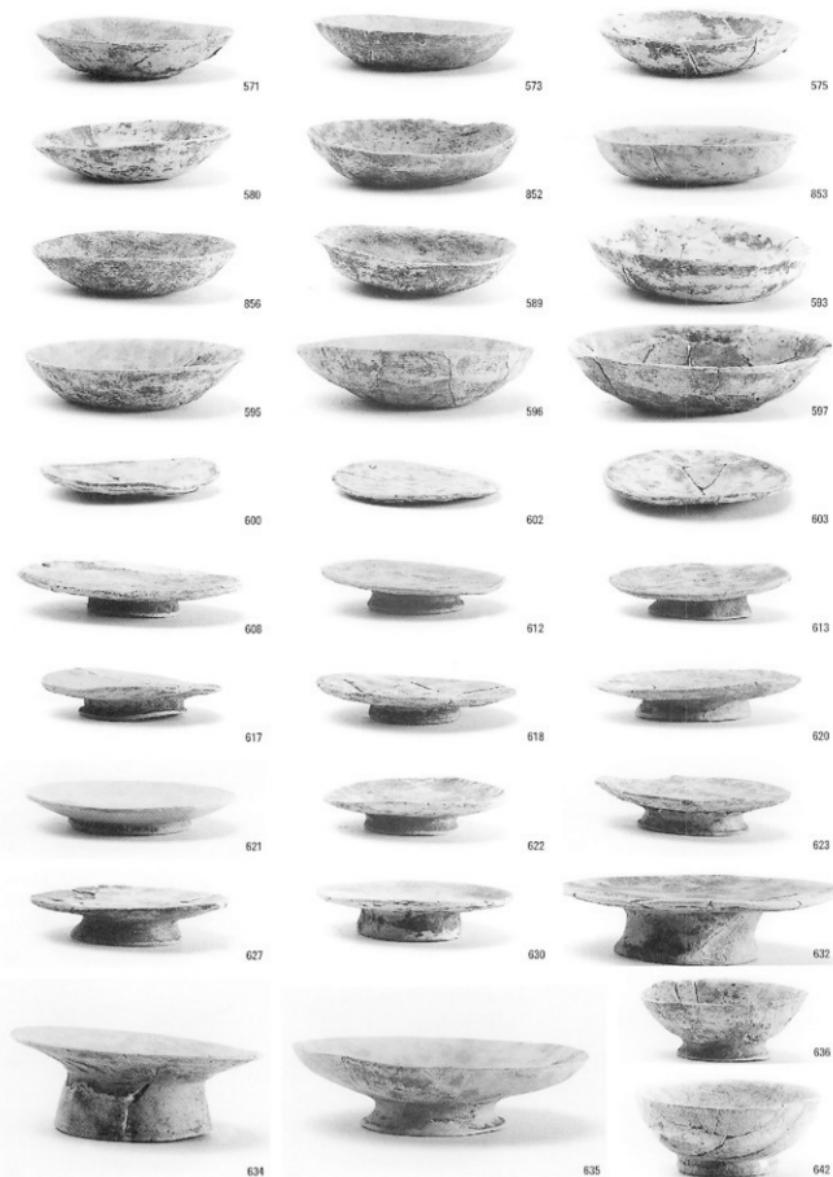
遺物写真 (SK 8088 SK 8084 SK 6792)



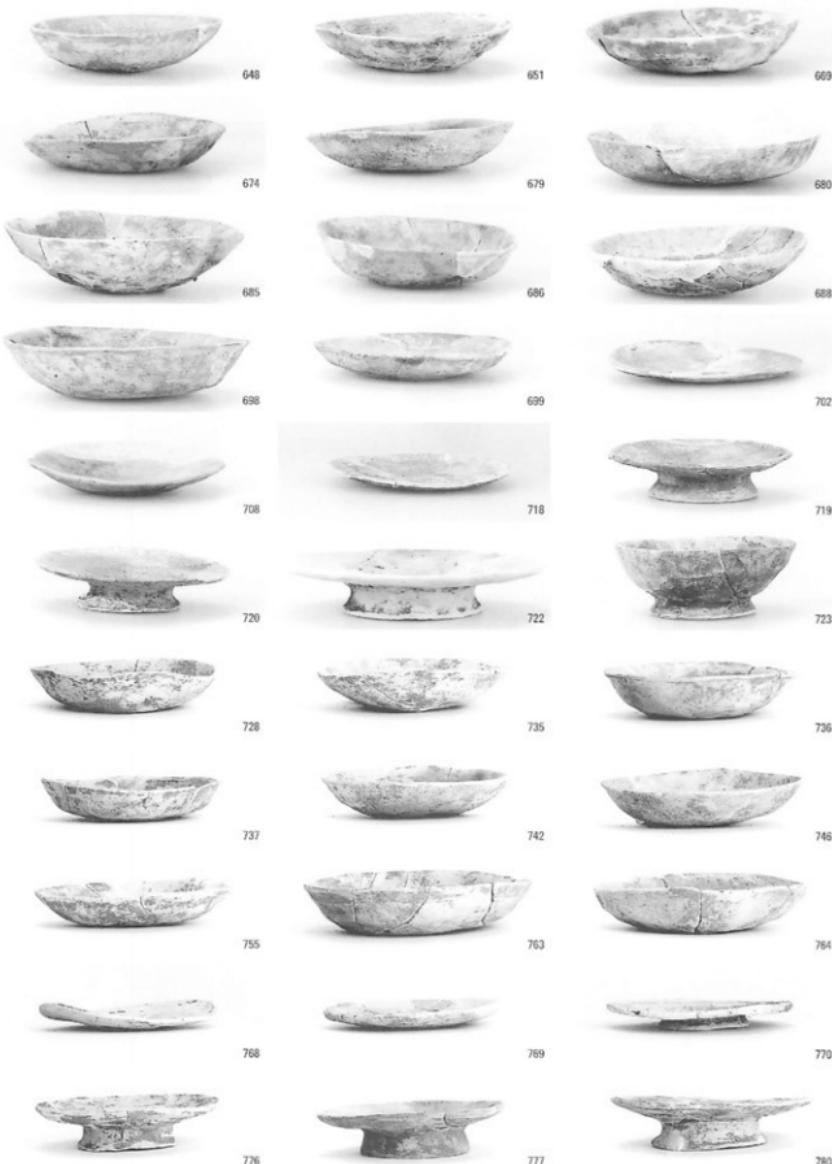
遺物写真 (SK6794 SK8071 SE8058 SK8059)



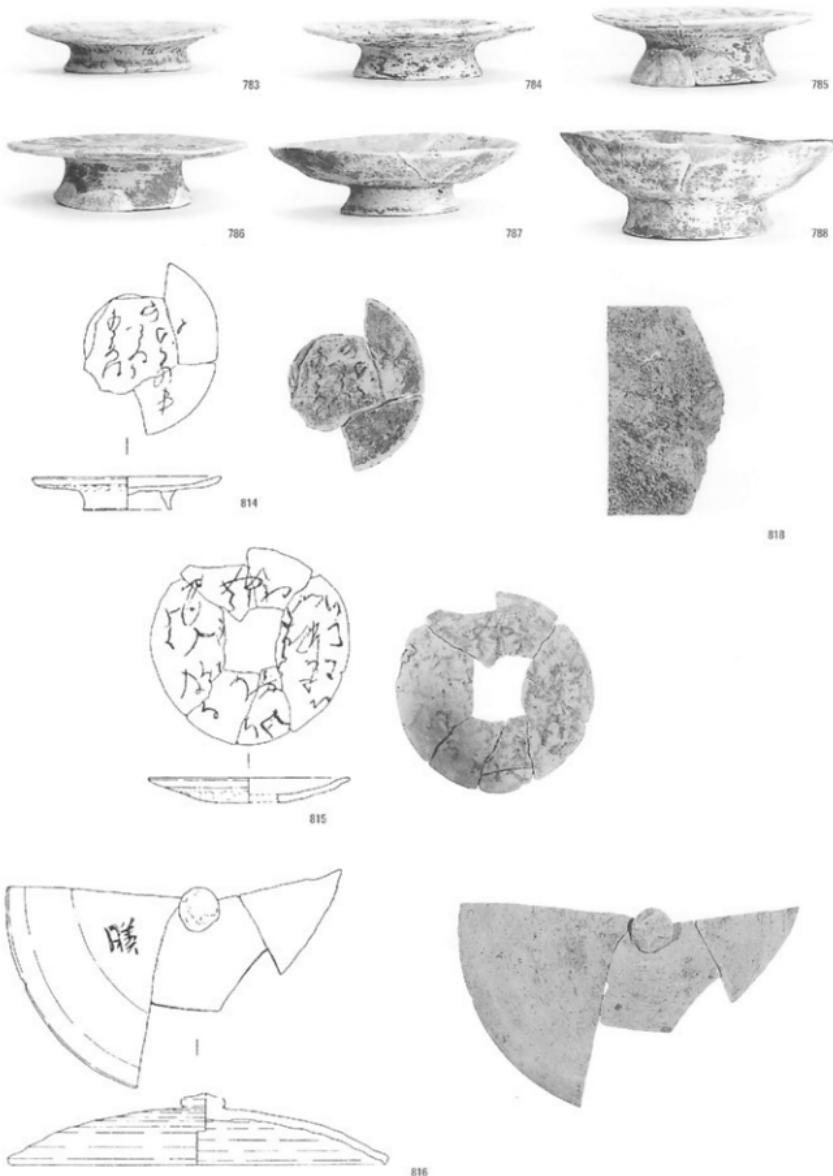
遺物写真 (SK8069 SK8072 SK6750 SD1460)



遺物写真 (S D1460)



遺物写真 (SK 8073 SK 8066)



遺物実測図 (SK 8066 墨書土器、石帶)

史 跡 斎 宮 跡
平 成 10 年 度
発 挖 調 査 概 報

平成12年3月31日

編集発行 斎宮歴史博物館
印 刷 光出版印刷株式会社
